正しい神の殺し方

漁火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
正しい神の殺し方

【Ｎコード】
Ｎ７５１７Ｅ

【作者名】
漁火

【あらすじ】
世界はどこか不安定だ。北の黒く閉ざされた国、魔法、神の声、オーパーツ。それらを競い、奪い合い、真実を知ろうと戦争が起きる。そんな最中におかしな目標を掲げる教会が存在した。世間には知られていないその内容は……。『神を殺すこと』

プロローグ

「ねぇ、やっぱり誰か見てきてよ」
耳の奥から聞こえてくるような声で、通信機から少年の恐れに満ちた声が響く。
「ラウ、これで三回目だが、セムは死なねぇよ」
女性の声は荒っぽく伝える。
「それ、より準、備。でき、た？　」
かすれたような、歯切れの悪い声で青年が呟く。
「今は仕事が大切だ……」
小さく低い声が耳の奥から響くと、仕事の始まりを告げる熱線が射出される。
夜という闇を、グールと呼ばれる人外の存在を貫きながら、熱線は正義を訴えながら街を横切る。
熱線が予定されていた地まで光をのばしきると、光は弱く小さくなり、再び光が帰ってきたときだった。女性の妖艶な声が、通信機から聞こえるとともに、戦闘の始まりを告げる。
「さぁ、楽しい楽しいお遊戯会だ」

とある街の北に位置する大きな、大きな協会で、神父は考えていた。
長いすの群れと教壇の間で、両脇の窓まで行ったり来たりを繰り返しながら、右手で長らく蓄えた顎鬚に違和感を感じつつ撫でる。
が、こんなことで悩みが解決できるのであれば、戦争なんてとっくの昔になくなっている。
少しネガティブな思考に入り、遮断する。
歳を推測するに、５０を数えているだろうと、皺や白髪などで推

測できるが、歩く姿はそこまで年老いていないようにも見える。
いきなりの事だった。そんなほぼ老人神父は教壇の前に立ち、自我が保てなくなったかのようにその場に倒れこむ。そして発狂。
「あーーーーー！　ケイちゃんはやっぱり行かせないほうがよかったかなーーー？　だって、俺寂しいし、彼女の初陣にグールはやりすぎかなーーー？　」
その場で二転、三転しながら、服を乱し、自我を壊しつつ、神父は悶えた。
が、それも一瞬にして終わりを告げた。同時に、神父としての、人間としての役目を終えたようだ。
誰かが見てる。
神父は寝た状態からゆっくりと真っ直ぐに姿勢を戻し、ため息を混ぜながらひざに手をのせ立ち上がる。全身の埃を払い、遠くに飛んでいったメガネを拾い、髪の毛をかきあげる。
満面の笑みをつくり、怖がらせないように近づいていく。ゆっくり、ゆっくりと。
教会の長いすの群れの前後の分かれ目が、教会の真ん中を示しているので、神父はそこで止まり、冷静に声をかける。
「どうぞ、立ち話でもなんですから」
刹那だった。閃光のようでもあった。ドアは閉められたのだ。
少しだけ怒気が混じった神父は駆ける。ドアに手をかけ、一気に開き、先ほどの少年を探し、捕縛。いや、拉致。
さらに周りを確認するや否や、教会に持っていく。
教壇をどかし机を置き、椅子を用意し強制的に座らせる。
「で、何の用だい？　」
満面の笑みが駄目だったのか、拉致がまずかったのだろうか、青年は明らかに怯えている。

一戒：アイゼンヴォルグ

“神の声”というものが、迷信のようにこの世を歩き、いつしかそれは世界のバランスを司るものに変わりつつあった。

不特定少数に“神の声”は聞こえ、“神の声”はそのものに特別な力を与える。

世界にその噂が流れる前は、あるものは不安にかられ、あるものはそれを信じることにした。信じるものは勿論、病気扱いされた。

が、人を動かすのはやはり時の流れであった。“神の声”を聞いたものは年々増加したが、人はやはりそれを信じなかった。それにより、“神の声”を聞いたものである種の団体が組織された。世界はそれを“ウィオーゴ”と呼ぶ。

“ウィオーゴ”は、数少ない“神の声”を聞いた集団で構成されるため、少数になるのは必然なのだが、通常一つの団体は１００人前後で構成される。

唯一、我々を抜いて、だ。

我々は良いように言えば少数精鋭、メンバーは私を入れて６人。ここに１人、多分、おそらく、我々のメンバーになろうとする人間が、妙に怯えているが、引きずり込むっきゃない。

「神の声聞いてきたんだろ？」

だったら無理やりに攻めるしかない。直球あるのみ。

どうにもさっきの私を払拭しきれていないらしく、話が弾まない。

「……はい」

どうにか一言を搾り出せたことに喜びは一入である。

「じゃぁ、ここで正解だよ。ようこそ、我がウィオーゴ、アイゼンヴォルグへ」

「あぁ……」

差し出した手に恐る恐る触れる。

まだまだ目を見ようとしない。よっぽど私のファーストインプレ

ッションは最低だと物語っている。ん～皆にばれたらことだ。
どうにも話が弾まない。受け応えるだけになっているため、こっちから攻めないといけないらしい。
「ん～、ここの一員になってくれるんだよね？　」
「あの、僕ずっと田舎暮らしで、何も……何もわからないんですけど、いいんですか？　」
「大丈夫、ウィオーゴは全国各地にあるわけじゃない、地方から、辺境からってやつがざらだ。そういうやつのために、ほら、ちゃんと案内書もある」
私は最近ようやく作り上げた案内書を出す。この国の全部を納めたため、少々辞書っぽい厚さになったが気にしない。
我々のこと、メンバーのこと、この国のこと、この国がどことどういう条約を交わしているかということ、その他もろもろ。
少し引き気味なのは否めない。前のやつも、同じような反応を示していた。
「我々の仕事上、土地やら地形やらに詳しくないと、いささかやりにくいこともあってね、それから法律。ギリギリ歩くから要チェックね、それから……」
「全部覚えろって……ことですよね？　」
「そういうこと。それと君、北のなまりがあるね、宿もとってないでしょ、これ、私の所有するアパートの鍵、地図はここに書いてあるからさ」
私はそのページを開き、鍵に書いてある住所と、案内書に書かれている住所を照らし合わせ、今いる教会とを結んでやる。
あまりにも急ぎすぎたか、キャパシティオーバーになってなければいいがと、少し不安になる。
青年は大きな荷物を担ぎ、辞書……あぁ、いや、案内書を小脇に抱え、教会の扉を開ける。
最後に振り返り、会釈をした。
私は思い出したように声を投げかける。

「君！　名前は？　」
「ラジェルタ……ラジェルタ・ハイデンツァです」
「私はセム……シェムルランガー・オリカルテ・トラスコットだ。よろしく」
ラル君はもう一度会釈をし、夕闇へと消えていった。
頭の固いお役人とばかり喋っていると、どうも話すのが苦手になってくる。
今回、奇跡的に上手くいったが、はたしてどこまで生きていられるか。ここで死んだものたちを思い出すだけで、確立が弾かれてしまうのが怖い。
ポジティブに計算しても、お世辞にも高いとはいえない。
彼がそんなウィオーゴの実態を知っているかどうかなんて、無に等しいだろうが気にしない。
最後まで責任取れと、じごきぬいてやる。それがここのやりかただ。
さぁて、そろそろ彼らは任務を遂行しているころだろう。彼らが帰ってくるのと、ラル君が再び訪れるのはどちらが早いか、ラル君が早く来ないと、少々心配な点があるのも、今は気にしないことにした。

二戒：C3（1）

教会での主な仕事は戦闘に関してのことで、それは個人が強いかどうかによって別けられはしない。殆どが気分である。故に、死のうが、怪我しようが、教会は知ったこっちゃ無い。

そんなぶっきらぼうな説明を真剣に読み進め、無知な自分をどうにかしようと奮闘する。

今いるこの国、スフィード女王王国は、東西に伸びる国で、大きくも小さくも無いが、隣国からしてみればあからさまに小さいのは明白だ。

隣のイスタリア帝国とはただいま不仲で、小競り合いはどこの国境でも日常茶飯事である。

教会と、僕の住むアパートのある街は、スフィードの中でも東に位置し、南にイスタリアとの国境がある。少しだけ南に飛び出しており、囲まれる形となっているが、ここでの戦争はあまり無いとのこと。

その中で不思議な単語が見つかった。“放置国家”一見字を間違えたかのように見えた。“法治国家”と“放置国家”を。

だが、読み進めるとその意味するところがわかった。

教会、つまりウィオーゴとは、独自の宗教と神の声を聞いたという団体で、国と一緒になって歩んでいるのは珍しいケース。だが、我らアイゼンヴォルグは違った。ここの街を守り、支援し、栄えさせることを前提に、国から統治命令が下されているのだ。

この街を切り盛りするために必要な資金は、国からの仕事、戦争、暴徒の鎮圧。グールの殲滅などでまかなっているそうだ。

ここで更に聞きなれない単語が飛び出した。“グール”である。

一番最初のページに戻り、目次からグールを引く。

隣国であるイスタリアは細胞や遺伝子学が富んでいるらしく、それについての実験には全てをかけているそうだ。それが人の命だと

しても。
　それにより出来上がった一つの薬がある。その名を“細菌活性促進薬H”と言う。数々の失敗により、名前の最後に“H”がついた。数々の命が失われた証拠でもある。
　この“細菌活性促進薬H”は、病気を正しい方向に促進させる作用があり、それはイスタリアの医学の最高権威“ミルディン・ローグゼイツ”氏が考案した一つの見解に基づくもので、病気は人間を進化させる道具で、それを拒み続けるが故に、日々弱体化するのである、と。
　が、この実験は万国共通でなく、イスタリア独自の技術であり、それを良しとしない人は多くいるらしい。
　それもそのはず。症状が1～3までの固体をアシュと呼び、アシュは体のどこかに人間では無い何かが現れる。それは、翼であり、角であり、うろこでもある。それはミルディン氏の思惑通りだと思わせた。しかし……。
　反対に、症状が5～8までの固体をグールと呼ぶ。人間である部分が極めて希薄になり、思考は薄れ、破壊衝動に満ち溢れてしまう。形すら人間と呼ぶに相応しくない。ならば獣か？　いや、それも否である。その体はさながら悪魔とも呼ぼう代物である。
　アシュは人間である部分が多いため、触れたり、血液に触れても心配は無いが、グールは体の殆どが細菌であるが故に、接触感染が起こりうる。
　しかし、グールの体の菌は、“細菌活性促進薬H”と、人間の体を媒介としているため、どんな病気がもとであれ、空気感染はしないのである。
　改めて驚愕。我々はこれを駆逐する立場にある。殲滅し、広がらないようにする役目を負っている。自分の顔を自分で見ることは不可能だが、多分青ざめているだろうと思う。
　仕事の内容を理解したところで、早速出勤とする。朝の礼拝と言っても語弊は無いだろう。

清潔感と、活気で満ち溢れる朝の街路地を歩き、教会にたどり着くが、いつ見てもいやにでかい。天井も高いし、ステンドグラスも高そう。
案内書に書いてあった時刻に来たのだが、それよりも早く、誰かが来ていたようだ。遠めで見たところ、一人は女性、一人は男性のようだ。
女性の方は黒いロングコートがさまになっていて、男のほうは、猫背でも随分背の高いことが伺えるが、その服装はボロボロというか、品のかけらさえないように思える。
静かに近寄るよりも、挨拶をしたほうが好印象かと、ドアを閉め、高らかに挨拶を。
「おはようございます」
が、残念なことに、その言葉はどうやら間違いだったようだ。女性がこちらに気づくと、隣においてあった何か馬鹿でかいものを片手でヒョイと持ち上げ、ニタッと笑うとこちら目掛けて飛翔。
剣が振り下ろされる直前に、神から授かった力を発動。
女性の時が二秒だけ遅くなり、僕の時が二秒だけ早まる。
女性の下を潜り抜け、その女性から目をそらさないようにバックステップ。セムさんに疑問を打ち付ける。
「何なんですか？　」
「一種のサプライズパーティーと思ってくれ、そのほうが心の余裕が生まれる。たぶん。きっと。おそらく」
しかしセムさんは笑顔を絶やさず、疑問符は更に増えながらも、女性は不適な笑みを浮かべる。
「ハハッ、面白れぇ～。セム、こいつ神の力もう使えるぜ」
「レイ、駄目だよ。前みたいに全身折っちゃ」
なにか怖い言葉が後ろから発せられたが、僕の耳のすばらしい機能によりスルー。
顔なじみのような会話をするぶん、少しの安心を覚えるが、それは不安を募らせるだけだった。

「さぁさぁさぁ、こいつはどこまでもつかな？　」
教会の玄関のドアから一直線。長いすにはさまれたこの地上で、不適な笑みを浮かべる女性は、剣とも昆とも言えるその武器を携え、僕に迫る。
後ろではセムさんが不適な笑みを、隣ではさっきの男性がトランプタワーを作り始めていた。
誰か、この状況を説明してくれないかと、心の叫びは虚しく響く。

三戒：C3（2）

教会の玄関のドアから教壇までの一直線。長いすと長いすとの間に生まれた、人二人分ほどの隙間を疾走するレイと呼ばれた女性を、ただただ恐怖だけで見つめる。

足がすくむ。腰がぬけそうだ。自分を強くその場に立たせる。

右下に構えられた剣は、疾走の終着点にたどり着くと、一気に左上に持ち上げられる。一歩退くだけで避けられることから、手加減しているのがわかる。

そこから繋げる攻撃が無いため、僕は左へと飛翔。が、甘かった。恐怖で力が入らないのか、あまり飛翔の力が生まれず、途中で追いつかれ、振りぬかれた武器で壁に打ち付けられる。骨がきしむ音を始めて聞いた。

立ち直ることすら出来ずに、壁に背を任せてその場にひざから崩れるように倒れる。目に前にレイさんの武器が突き刺さる。どうやらチェックメイトの合図だろうと、心のどこかで気づく。

「セーム！　駄目だ。今度もハズレだろ、強くねぇ」

「力だけが全てじゃないと、信じたいんだよ」

「人手不足解消したいだけだろ」

「わかってるならいいじゃない。それとも、レイが雑務をしてくれるのかい？　」

「勘弁だ」

苦々しく言葉を吐き、武器を引き抜くと、僕の襟をつかんで投げる。

到着地点は教壇の前。セムはやはり笑っている。

「いやいや、すまないね。レイ君は新人を見つけると、殴りたくなる戦闘狂なんでね、ケイ！　」

意識は朦朧としながらも、どうにかセムさんの言葉を頭にとどめていると、また新しい名前が聞こえた。

トランプタワーを作っている男性かと思いきや、どこかで扉の開く音。一人の少女が僕の前に立つ。
少女は座り込むと僕の腹部にそっと触れる。折れているのだろうか、少しだけ痛みを感じた後に、どこか優しさのような暖かさを覚える。すると、不思議と痛みは消えていた。意識もはっきりする。
「ありがとケイ。それじゃ、改めて話をしようか」
考えがまとまらない。どうしようかとたじろぐ。セムはポケットから小型の何かを取り出した。
「これを耳につけてみて、これは受信機で、ある一定の周波数を放つ魔法を感知すると、音を送ることが出来る。緊急の仕事の連絡はそれでするから、それと、皆の自己紹介だ」
セムは順に手を伸ばし、指で指し示しながら伝える。
まずはさっきの女性。レイリア・ルビーデ。主に前衛担当。戦争は嫌いだが喧嘩は大好きな戦闘狂で、戦争の仕事は殆ど半殺し。
そして、教会の奥から出てきた少女を指差す。ケイト・バルハロイ。主に雑務担当で、つい最近仕事に初参戦。魔法の腕は相当なもので、僕の体がそれを物語っている。
トランプタワーの方向を指差し、ロキ・リベルトウィッチ。主に狙撃、後方支援担当。火器を操るのが得意で、それに関した魔法も相当なものだとか。
「レイ、ギンとラウ君は？　」
「さぁ？　召集がかかるまで来ないんじゃない？　」
「じゃぁしょうがないな、集めますか……『ギン、ラウ、至急教会まで』」
さっきの発信機から声が漏れる。なんだかなれないとくすぐったい。
それが聞こえてから一分もしない間に、その二人であろう男性が教会に到着。
どちらも無表情で歩く。一人は精悍な体つきで、目には何故か鉢巻のようなものが。が、その歩みはしっかりとしていた。

もう一人の男は、僕と年が近そうだが、どこか子供じみていて、その顔は不安と恐怖で埋め尽くされているかのようだった。
「で、今回の仕事は？　」
野太い声で鉢巻男が尋ねる。
セムはあっけらかんと、自己紹介だと言った。
「ラル君でね……」
いつの間にかあだ名がつけられているが気にせず聞く。
精悍な体つきをした男のほうは、朝雅吟（あさがぎん）、極東の生まれとのこと。特殊な戦闘民族で、生まれてすぐに目玉を抉る習慣があり、今は眼は無いとのこと。仕事以外はあまり話さない無口なおっさん。
もう一人の少年は、ラウリー・トラスコット。孤児だったらしく。セムさんに拾われて、トラスコットの苗字をもらったとか。主にサポートが担当で、神の力で探知能力などに長けているとのこと。仕事でもプライベートでも、殆ど喋ることが無いらしい。
「こんなところかな。それと、ここの決まりだけど、人の過去は詮索しないこと、いいね」
「はい」
僕は弱く返事をする。
と、共に、教会の扉が強く開かれ、すこしだけ変な音がした。
そんなことを気にも留めずに、一人の甲冑に身を包んだ男性が駆け寄り、倒れこむが、報告を述べる。
「ハァー、ハァー、ッッ！　ハァ……。あ、アイゼンヴォルグ、セム殿、国境に敵だ。至急応援を」
そんな必死な姿を見ても、誰一人として揺らがなかった。
強いて言うなら、ふてぶてしかった。
「で、金は？　」
「そ、相応を払うと……だ、だから、だから、早く！　」
重たい腰を上げると、セムは笑顔で手をたたく。
そして、その場にちょうどよくそろった皆に仕事の報告を開始する。

「さて諸君。これより状況を開始する。レイ、ギンはいつものように城門の外で、ロキとケイは兵糧を狙え、ラルとラウと私は篭城し、兵士を統率する。
ラル君。それともう一つ、ここには重大な約束がある。それは、人は殺さないことだ。
だから、今回の戦争でも、レイとギンが倒したやつは、全員野放しか、捕縛だ。
さ、ロキ、移転魔法だ。一気に片付けるぞ！」
言葉に反応は無かったが、全員は無口で了承をした。
僕に否定権など無く。武器一つ持たないまま、戦場に立たされる羽目に。
ロキさんの発動させた広範囲長距離移転魔法により、全員が戦場である国境の城に一瞬で到着。心の準備が出来ていないまま、全員が持ち場に着く。
今回僕の役割なんて微々たる物だと、城の中でただただ立ち尽くすのであった。

四戒：C３（３）

「そこそこそこ、狙いがバラバラだ、集中しろ。魔法兵はどうした？　陣の展開が遅い！　」

セムさんの怒号が飛ぶ。外では断末魔が響いている。たぶんあの二人が響かせているものだと、予想がつく時点で戦場の恐怖を知る。

ラウ君は仕事に慣れているようで、魔法兵の支援をしている。

僕はどうしようかとあたふたするものの、補給兵の配布の手伝いくらいしかできることは無かった。

この集団に入ってすぐに気づいてしまった。自分の無力さを。

それと共に、自分が何なのかがわからなくなった。

記憶喪失かと思った。だがそれは否だった。欠けている記憶は無い、むしろはっきりしている。

はっきりしているが故に、見えてしまう過去があった。

何故なのだろうか、人は思い出せるのに、顔がぼやけている。地名は思い出せるのに、どこにあるのかわからない、何故そこを知っているのかがわからない。

が、その時はまったく気にもしなかった。ちょっとした老化だろうと、今でも思っている。

補給を続けること数時間、戦況は動き始めた。それは耳から漏れた。朝もらった通信機から、途切れ途切れの声が聞こえる。

「敵の補、給部隊、を、壊滅。今、から後、方支援に、回る。以上」

セムがそれを聞くと、外にいる二人に声をかける。

「レイ、ギン、捕虜を十名ほど、ラウ、ラル縛りあげろ」

その指令と共に宙を舞う何かを視認。押しつぶされる形で着地された。

横目で見るとラウが早速縄を取り出し、意識を失っている男達を縛り上げる。

僕も負けじと必死になって縛り上げる。隣をチラチラと見て、縛

り方を盗む。結果僕が縛ったのは二人だった。
ラウは文句を言わず、兵士を引きずり城門の上へ、僕も挽回しようと運ぶ。
意外と年下に嫉妬するたちなんだと気づく。
「で、どうするの？　」
十人全員を城門に乗せると、僕は疑問符を浮かべる。
ラウはかすれたような声で一言。
「吊るす……」
そう言って、手の辺りから伸びたロープのあまりを、城門に打ち付けられた杭に縛り、ぶら下げる。
同じように僕も作業を手伝っていると、一人の兵士が意識を取り戻す。
「うぅ……っ！　」
意識を取り戻したことによる、各所の痛みに苦悶の表情が隠しきれずに、低いうねりの様な声を上げる。少しだけ僕は動揺する。
戦争なんて初めてだし、敵兵士を目の前にすることだって勿論初めて。縛られているとはいえ、どこか威圧感がある。
しどろもどろしていると、その兵士と眼が合ってしまった。
空間が止まったかのように、少し真っ白な時間が流れる。対処がわからない自分が作った悲劇である。
「……らぎりもの……」
掠れた声が何かを伝えようと、僕の耳に響く。
それは強く強く、更に、怒りが込められた憎悪のような、醜悪さを込めた言葉が、僕の耳に響く。
「この、裏切り者！！　」
全身に電撃が走るのを始めて知った。どこか見透かされているような言葉に、目の前の兵士が怖くなった。
薄れた記憶、曖昧な記憶。完全でない記憶一つ一つを蝕むように、その言葉は僕に響く。
さらに空白。

そいつの口からは怒りと、もどかしさで、かみ締めた歯から音が漏れそうなほどである。
刹那、セムが兵隊の首を平手で打つ。同時に意識を失う兵士。平常心を取り戻す。
「バカ、こういう奴の言うことは、まともに受け止めるな」
「は、はい……」
否定できない僕がいた。否定できない記憶が語った。
それでもと、僕は作業を続ける。
全員を吊るし終わると、戦場に静寂が響く。それを破るのはセムの怒号。
「イスタリア軍諸君よーく聞け、我が名はシェムルランガー。貴様らの兵糧は焼き払い、貴様らの兵は捕虜となった。
が、我々は殺しを好まない。、故に彼ら捕虜は返してやろうと思う。条件は簡単だ、引け。
このまま兵糧がなくなるまで戦うも良しだが、その時捕虜の命は無いと思え！！」
ざわつく戦場。共に、安堵を浮かべる味方諸君。
城門にて吊るす作業をやっていた僕は、戦争の終結するところを始めてみた。
敵陣から一人、代表者が顔を出す。
「シェムルランガー殿、貴殿の要求を飲む。これから兵を後退させる。そちらも兵を城に収め、捕虜をつれて一人で来られよ！」
「あいわかった」
後退する軍、一人残る将。
開けられる城門、帰ってくる兵たち。
その中には、尋常でない傷を負ったレイとギンの姿もあった。その傷と血の量に、少しだけ吐き気を催す。
吊るした捕虜を切り離し、セムは移転魔法で指定場所まで送る。
「さ、返してもらおうか」
「言われずとも……」

更に移転魔法で少し移動させ、将のすぐ横まで運ぶ。
が、将はどうやらそれでは気がすまないようだった。
「一人では運ぶのに億劫だ。さ、出て来い」
移転魔法による奇襲。それでも凛とセムは立つ。
「ちょ、皆さん、セムさんが！　」
「バーカ、いつものことだよ」
ケイに治癒魔法をかけてもらっているレイが、僕に罵声を吐く。
“よ～く見てみろ”と、レイに言われると、ようやく一つの事柄に気づく。
「あ、ロキさんがいない……」
「さ、そろそろだ」
ギンが笑いながら外に指差すと、奇襲に来た兵の右肩に何かが当たる。
地が噴出し、断末魔が響き渡る。ロキさんがやってくれたのだと、自分がやったわけではないのだが、少しだけ誇らしげである。
セムは何事も無かったように、手をあげて歩いて帰る。少し笑いながら、セムは帰ってくる。
「さ、帰ろうか」
セムはやはりニッコリ笑いながら、僕達に小さな戦争の終末を知らせる。
帰りはやはりロキさんの移転魔法。先ほどセムさんも使っていたのと同じだろうと思うが、少し規模が大きい。
教会に帰ると、セムは金を受け取りに城に向かう。
全員はそれぞれ解散する。どうやら皆にしてみれば、ただの小遣い稼ぎのようなものらしい。
少しだけ疑問が浮かんだので、歩み始めるレイさんの背中に言葉を投げる。
「レイさん」
「なんだ？　」
欠伸をしながらレイは後ろを振り返る。

「あの、これってどれくらいの金が発生するんですか？」
「っと、越境阻止で、死亡人数は最少レベル……ん～。１人１００万らいかな？　じゃ」
その額に少し唖然し、呆然としてその場から動けなかった。
とにかく、その額がこの国では普通なのだろうと、勝手に解決して家に帰る。
少しだけ金の額に興奮し、あまりいい眠りは迎えられなかった。

五戒：C３（４）

魔法はどうやら難しいものらしい。
この国では魔法使用免許なるものがあるらしく、免許相応の魔法しか行使できない規定になっている。
それでも階級は十二しかない。十級から始まるが、これは魔法覚えた手の僕ですら取れる。なにせ、用意された魔方陣を発動するだけで、魔力をそこに注ぐだけの作業だからだ。
それが一級まで進むと、次に待ち構えるのが特攻魔法免許である。召還、契約、封印などの高位の魔法になり、制御を効かせるのが難しいし、持続することも難しさの一つだとのこと。
一般人が止まるのは、この特攻魔法免許ではない。一番層が厚いのは四級。センスが無いものは大体ここで終わるらしい。
四級までの力は、まだまだサポート程度、剣に炎を纏わせる、風に乗るなどである。
特攻魔法免許を取得している人間は、たったの四人とのこと、が、驚くのはまだ早い。それより上がいるのだから。
特攻魔法免許の上にもう一つ、禁忌魔法使用許可免許というものが存在する。
悪魔や神獣の召還、血や魂の契約、記憶の封印、更にはオーパーツの発動、解明なども禁忌魔法に含まれる。
そして、魔法といえど攻撃だけでない、防御、回復などにも同じ階級が用意されている。
それでも、禁忌魔法使用免許保持者は、この国で一人だけである。
この国、いや、世界全体で火薬なるものの製造が禁止されている。
遠い昔の世界の決まりごと、守り続けるのは理由がある。それは、逆らえないからである。
世界で最もオーパーツの調査に力をいれ、国力、国土共に世界一位を築き上げる南の国が制定したものだからである。が、しかし、

今となっては魔法でそれは補えるようになってきたため、火薬の調合などは、もはやそれ自体がオーパーツ扱いである。
では今はどうやって火器を用いているのかというと、仮想弾装空間に陣を敷き、弾を充填し、高出力発生陣を展開させ発射。
つまり、魔法さえ使えれば問題は無いのである。
グリップに手をかけ、銃に魔力を注ぎ込み、引き金を引くだけで全てが発動する。ただそれだけである。
魔法の使用に必要なのは、集中力とアイデンテティ、頭の中で陣を展開させ、それを現実に投影する。
魔法に使われている古代語などの究明は、何故人がいるの？　と、同じような質問で無限後退せざるを得ないから、使えているからいいだろうという解釈だそうだ。僕も、使えない立場としては、難しいことを言われるよりはるかに簡単で助かる。
そんなこんなで二日軟禁されてます。太陽が見たい。
前衛向きではない。いや、前衛は十分すぎるし、普通の人間じゃ間に合わない。だから僕は後衛らしいです。
確かに肉弾戦を任せられても困る。運動なんててんで駄目。体は緩みっぱなし。魔法から入って正解だ。
ほぼ拷問に近い教育を受けながらも、自分は正しいのだと言い聞かせる。
「あ……」
少しだけ気になっていたことがある。
僕が武器を支給された昨日から、それは急激に動き始めていた。
武器のグリップ、刀の柄には、金字で“Ｃ３”の文字が怪しく煌く。
そして、それはロキさんの手入れしているライフルにも、レイさんの隣に無造作に置かれた野太刀にも書かれている。
案内書の裏表紙にも、金字で“Ｃ３”の字が書かれている。
「どうしました？　」
そんな僕の声を聞いてか、セムが覗き込むように笑顔を見せて質

問した。
僕はあどけない子供の表情だったろうか、無邪気に質問をする。
「この“Ｃ３”ってなんですか？」
「あぁ、それか、それは僕達のロゴだよ、なかなかだろ？」
でも、このウィオーゴの名前はアイゼンヴォルグ、どこにも要素が含まれていない気がする。
「ふふ、アイゼンヴォルグを思い浮かべただろ、でもこれは違う。この街での、この国、ここの存在を知っているものの愛称さ。
“Ｃｒａｚｙ ｃｈｉｌｄｒｅｎ ｏｆ ｃｈｕｒｃｈ ……教会の狂った子供たち”
僕達はそう呼ばれているんだよ」
その言葉に共感。とはいかなかった。無口ではあるが、狂ったとは少し言いすぎではと思っていた。
そして、このころの僕はまだまだ若かった。後になって思えば、それ以外の何者でもないと、この教会を見渡せるようになるのだ。

六戒：ロキ（1）（前書き）

ロキの物語です。
最終的にマルチエンディングみたいになればと考えています。

六戒：ロキ（1）

ロキ・リベルトウィッチ。推定年齢二十代後半。推定身長百八十前半。体系ガリガリ。無口。趣味トランプタワー。彼女の有無、いまだ不明。特徴は猫背。

今のところわかりうる薄っぺらな情報はそんなところで、トランプタワーを作るところ以外見たことが無いのが現実。一番謎の人である。

ここに来て、普通に動けない自分がいることに気づく、女性より走るのが遅いのは重症だと思った。

魔法は当たり前なんだと気づかされた。ただいま勉強の真っ最中でありながら、頭は真っ白、いや、真っ黒で何がなんだかわからない状況にいる。

「動いた……」

野生動物を監視するハンターのような呟きをもらし、トランプタワーを逸脱したトランプタウンを潜り抜けてくるロキを目で追う。中央の長いすと長いすの間を猫背で歩き、暇なことと外の寒さに嫌気をさしたレイの肩を叩く。

「ん？　」

眠りを妨げられたことを少しだけ心外に思った後、何かに気づいたように跳ね起きるレイ。

笑顔で背中を押し、この上の無い楽しいことをしようとする子供のような笑顔を浮かべ、レイは教会を後にする。

「セムさ～ん。あれなんなんすか？　」

「ふふふ、秘密だよ」

「え～」

長いすに座りながら、前の長いすの背に顎を乗せ、頬を膨らませる最終兵器を使用すると、隣にいたケイがお腹と口を押さえてどこかへ言ってしまった。ツボったようだ。

また少し謎が残りながらも、勉強を再開すると、セムが暖かいココアを持ってくると同時に、そっと呟く。
「お土産いっぱい持って帰ってくるからさ、楽しみにしてな」
その一言で全て許せてしまう自分とはなんなのだろう？

最低限の金だけ貰えればよかった。
家賃、光熱費、武器の修理代、食費。
趣味なんてないし、彼女なんていない、娯楽を見つけては、女性を見つめては、自分が卑しい存在なのだと自分を戒めてしまう。
おいしいものを食べても、自分が楽しいと思ってしまっても、自分の存在が駄目に思えてしまっていた。
が、レイがそれを無理やり破った。人のせいにして自分の過去を捏造使用とは思わないけれども、少しだけ嬉しかった。
「あぁー、前赤使ったから、今回は黄色か？　いや、青か？　」
強制的に皆と同じ金を貰って、使わない分を服につぎ込み、手伝ってもらっている。
そう、他人からすれば俺は恋をしているようだ。そう聞くとまた、心が見えない縛鎖に締め付けられる。
相手は俺と同じように、いつもはファッションなんかに興味なく、仕事命みたいな女性で、俺が通う修理屋の一人娘、名前はエミリア。けど、彼女には好きな人がいるのだ。
傭兵のリカルド。俺みたいに、口実作ったりと面倒なことはせずに、直球に攻めている。
まったくうらやましい性格だ。
そんな二人を見ながら、自分の幸運を望まない俺は、二人に幸運があらんことを祈る。
「お、ロキ、ひっさしぶりだな」
今仕事から帰ってきましたと言わんばかりの格好で、軽装備にロ

ングコートのいでたち、何を着ても様になるやつだ。
俺は、客のために置かれた机にスナイパーライフルを無造作に置くと、呼ぼうとしていたエミリアが満面の笑みで奥の工房から出てきた。
「あ、ロキ君久しぶり、一ヶ月くらいぶりだね」
「あぁ、それよりこれを直してくれないか」
「会話を楽しまないと、嫌われるぞ～」
「うるさい」
「そうよ、修理の依頼一つしないあなたより百倍ましよ」
「俺はものを大切にする性格なんだよ」
戦争、暗殺、過去、罪と罰。ここではそんなものどこかへ忘れられるから好きだ。
あの時あの瞬間から、二度と手を取り合うことなどするものかと誓った人間と、再び手を取り合うようになった最初の友達リカルド、あの時以来、人間を信じることも、愛することも止めようとしていた俺に、愛とか、恋を教えてくれたエミリア。痛いほどに優しい。
時にこの優しさや、暖かさを知るたびに、それは鉄の茨へと変貌する。まだ俺は過去を捨てられないし、あの光景がまぶたの裏にくっきりと残っている。
「で、どこらへんがおかしいの？　」
「スコープと仮想弾装空間に違和感が感じられるんだ」
「わかった。ちょっと待ってて」
エミリアは奥へ工具を取りに行く。
リカルドはわざと目を細め、口の両端を吊り上げる。
「なんだそのいやらしい笑い方」
「いやぁ、春だなぁって……」
確かに最近少し暖かくはなってきたが、それを俺を見て言うのは何かあるのだろうか、その後だいぶ俺を苦しめることになったが、今は気にしない。
エミリアは工具をとって戻ってくると、俺たちの座る机の向かい

側にいつものように座る。
「ん、簡単そうね」
ライフルを解体しながらエミリアは呟く。
「それでさぁ」
始まった。リカルドの自慢話。
今回は東に行ったようだが、あそこは確かだいぶ激戦地になっていたようで、今でも毎日必ず小競り合いは耐えないほどだという。
俺とエミリアは、いつものように話半分の耳でリカルドの話を聞く。
奇襲に成功しただの、報酬をはずんでもらっただの、領地を少しだけ広くしただの、相手の将軍の首を打っただの、だんだん妄想が入ってきた気がするが、暗黙の了解で引き続き聞き上手になる。
「で、俺一人で敵の拠点まで行ってさ……」
「はいできたーーー！」
耐えられなくなったのか、本当に出来上がったのかは別として、俺は料金を支払う。
財布なんてもっていなくて、いつものクシャクシャな札を渡す。
「少し色をつけておいた。次も頼むよ」
俺はそういって帰ろうとすると、エミリアは俺を呼び止める。
「ロキ君、。飲みに行かない？　三人で」
「おいおいもしかして？　」
リカルドは嬉しそうだが、次のエミリアの言葉を聞き逃すまいと顔を覗き込む。
これは毎度のパターンだ。
「リカルドのおごりでさ」
「またかよ～」
「報酬はずんでもらったのでしょ？　」
そういわれると弱いのか、いつものことに諦めたのか、リカルドは椅子から勢いよく立ち上がりコートを羽織る。
エミリアは仕事を抜けることを父に伝えるため奥へと消えて行き、

俺は飲みに行くことを考え、ライフルをコートの中に隠す。
　リカルドは今までの経験上から、どこの店がいいかを思案。毎回毎回店が違うのもすごいことだと、そこだけはリカルドに感心する。
「ところでさ、お前はどうなの？　こっちの方は？　」
　リカルドの小指をここまで折りたくなったのは久しぶりだ。
「前にも言っただろ？　」
「過去にすがるなよ、今を生きろ、この臆病ものめ」
「何とでも言え」
　確かに、確かに俺は過去を引きずっている。
　振り払おうとしても、その腕にまた絡まりつくのだ。
　物思いにふけっていると、なんとか了承を得たのだろう、エミリアが戻ってきた。
　彼女はありのままの自分を恥ずかしがらないところに、俺は尊敬する。つなぎの上に防寒着だけを来て用意が出来たと言うのだ。
　いつもの俺を見ているようで、少しだけ自分が恥ずかしくなる。
「はぁ、それにしても寒いわね」
　僕達は彼女を挟むようにして歩く、小さな谷が出来ているようにも見える。
　そして毎度のこと、リカルドはエミリアの肩に手を回そうとして手をはたかれる。
「あれ？　なんだかいい香り……ロキ君？　」
「あ、あぁ、うん。フィムリっていう店のオードトワレ」
「いい香り……冬にぴったりね」
「あぁ、ありがとう」
　レイの選んでくれたオードトワレで彼女が喜んでくれた。
　俺はいつものように、皆にお土産を買っていかなきゃと思案するが、少しだけ引っかかった。
　そういえば新人は何を好むのだろうか、ここは自分の好みでいいだろうと、余計なことは忘れて、今この至福の時を過ごすとする。
　これは日常でなかったと、俺は気づかされてしまうその時まで…

。

七戒：レイ（1）（前書き）

レイの物語です。
こちらもマルチの一つです。
他の人もそのうち作ります。

七戒：レイ（1）

レイリア・ルビーデ。通称レイ。
身長は女性にしては大きな百七十くらい。体重は筋肉質なので多そうなのだが、口にしたり聞いたりしない。殺されるにはまだ後にしたいからである。
主に前衛で、戦争は嫌いだそうだ。大量虐殺よりタイマンの方が燃えるらしい、本人比三倍弱らしい。
楽しいことが大好きで、首を突っ込みたがる性質（たち）で、ごちゃまぜにした挙句そのまま飽きたらポイな人だ。
ここに来てあまり日が経っていないこともあり、詳細はこれくらいで、他はギンさんとは特に仲がいいっぽい。ケイとも仲がいいっぽい。
「お、行くかぁ」
ロキが動き出す。トランプタワー……トランプタウンを潜り抜け、レイとどこかへ行ってしまった。
「セムさ～ん。あれなんなんすか？　」
「ふふふ、秘密だよ」
「え～」
若干ひかれるギャグをかましてやると、ケイはツボに入ったらしい。
俺は再び魔法の勉強に精を出すことにする。

「お土産よろしくな～」
窓から手を振ると、恥ずかしそうにロキは背中を向けたまま手を振り返す。
あいつがあの女と知り合ったのはどれくらい前だろう、無口なあ

いつが顔を真っ赤にさせて教会に帰ってきて、震える手でトランプタワーを作っていて、何度も崩していた。
それを見て私は何度も笑ってしまった。
後日聞いてみると、どうやら恋らしい。本人ははぐらかしていたが、おもむろにそれっぽい好感触な気持ちの表れで、聞いてるこっちが恥ずかしくなってきた。
しょうがないなと私は協力してやっている次第である。
セムに貰う給料を、少しだけ増やしてもらい、服をがっつり買って、香水もがっつり買ったりして、できるだけ尽力してやった。
恋が出来ない私の分まで、恋して幸せになれと願っているからだ。
「ぐっっ……」
胸に重い痛み、頭にも、ヤバイ……どうやら薬が切れたようだ。
日ごと周期が狭まっていく間隔はあった。だけど、ここまで早いのは久しぶりだ。
ここから距離を考えると、家にたどり着けるかどうか危ういくらいだ。
壁を這うように、腕で体を支えて、おぼつかない足で帰路をたどる。駄目だ。途中で事切れそうだ。
ほら、やっぱりだ。こんなとこで死ぬのか……あいつは、助けてくれないだろうな。なんだろ、死ぬのが少し怖いかも。あれ？　誰だろう、暖かい……。
「……い、レイ！　大丈夫かお前？　」
「ギン……か、」
脱力。
どこにも力が入らない。ようやく紡いだ言葉も味気ない。
最後に一言、やっぱりまだ、死にたくない。
「私の家の……食器だ、な……の、小瓶のくす……り……」
「おい、レイ！　レイ！　くっそ……」
こんなに弱った彼女は初めてだ。
破竹の勢いで俺に襲い掛かり、強者と戦いたいと教会の仲間にな

り、いつの間にか俺を抜かした君は、戦場でどんなに傷ついても、意識を失うことはなかった。
ボロボロになりながらもうすら笑ってその場に立って、敗北者を眺めながら勝利を誇るのがレイだと思っていた。
戦闘狂で、強いだけが取り柄かと思っていた。
こんなに弱いレイを見てしまうと、イメージがた崩れだ。
そう、昔あの時、レイに俺の自分のことを話した俺を見ているようだった。
強い奥に隠れた弱さと、孤独と、虚無感。
きっと彼女は、俺がそばにいても一人ぼっちなのだ。

「あ……」
気の抜けた声が漏れてしまった。
死のふちでダンスを踊って、半ば落ちかけて戻ってきても、いきなり喜びで満ち溢れるわけではない。
むしろ、なんだか、前よりも何かが怖かった。
「起きたか……」
「ずっと隣に？　」
「あぁ、こんなレイを見るのは、これで最後だろうからな」
反論したい自分と、反論できない自分。
いきなりすぎて話す覚悟が出来ていない。彼は私に、心を許して話してくれたのに、私はそんな勇気が無い。
「やっぱり、喋ってくれないか……」
ギンは冗談まじりのような、心を見透かしたような不適な笑みを浮かべ、キッチンへと向かう。お湯の沸いた蒸気の音が、今日は妙にうるさい。
いつものマグカップに、私の好きなアールグレイを注いでギンはやってきた。
髭に盲目に童顔のおっさんは、いつもどこか妙に優しい。
それゆえ、私は深く傷を抉られる。それを快感を覚えるほどの趣

味は、残念ながら持ち合わせていない。
「ごめん……いつか、喋れるときに、また」
「落ち込むな、気持ち悪い」
いつもの調子で私を励ます。
そうだ。言えないということは、これからの自分を創るのではなく、今までの自分を演じること、考慮して言ってくれたのだろうと、少し顔が綻ぶ。
「そうだ、今日ロキがデートだから、お土産があるかもしれないな、今何時だ？　」
「真夜中の十二時だ。いいタイミングだな、た……いや、なんでもない」
どこまでも手が込んでいる。
私に“立てるか？”なんて疑問は、愚問中の愚問。彼が、私を私でいさせてくれた証拠。
でも、その言葉さえも、私を私でなくしてしまう要因なのだ。
私はそんなジレンマに耐えながら、これからも生きていく。
なぜなら、そのどちらにも道はあり、いつでも逃げ出せるからだ。まだ耐えられる。まだ大丈夫。私は“あいつら”を殺すまでは、死んでも死なないし、死ねない。
たとえ、何があろうとも。

八戒：ラルのお仕事（1）

「じゃ、言ってくるから留守番よろしく」
国からの命令でまた戦争に行くそうだ。どうやらここ最近探りあいが激しく、全面戦争も近いかもとのこと。
が、そうだといわれてもパッと思い浮かばない。
記憶の中には確かにあるはずなのに、やはりどの記憶にも靄がかかっている。
忘れたわけじゃない。覚えていないわけじゃない。見えないって、ここまで辛いんだと、初めて知った。
僕がここに残った理由は二つ。一、戦力としての魅力が極端に無いから。二、ってか魔法も使えないの？　馬鹿じゃない？　的なレイのノリ。
二つ目は自分でもよくわかっている。町中誰でも魔法を使い、どうやら最近最年少で特攻魔法免許をとったという少女がいるらしい。
この記憶の靄のせいか、素質が無いのかは知らないが、僕はまったく魔法が使えないのだ。故に、ここで今一人虚しくホットドッグをかじりながら、猛勉強をしているのだ。
最低目標は四級だそうだ。それが出来なければ、レイさんか、ギンさんに追いつけとの無理難題。簡単な魔法を選択するのが現実というやつだ。
C３の名前は伊達では無かった。
前、大人の人が子供に“あそこの教会は、大人にならないと入れないのよ”と、どうにか言い訳を作ろうと必死になっている姿を見た。
確かに、子供に優しそうと言ったら……意外なところでギンさんとして、後は無難にケイ。しかし、相手が男の子だとセムさんが殺し兼ねない。
ここ最近戦争で静かなのをいい気に、子供たちが肝試し感覚で訪

れる。その度に重たいドアの開く音を聞く。正直、俺も子供にどう接していいかわからないため、話しかけてくるまで無視をしている。
セムさん達が戦争に行って四日というところだろうか、思わぬ訪問者がやってきた。
ドーンという破砕音。旋律が走るが、拍子抜けな声も聞こえた。
「ルグルさん。引くんじゃなくて押す方でしたね、修理費どうします？　」
「経費落ちるかな？　私的用事だから俺でいいわ……あれ？　」
最後のひとかけらを飲み込み、お留守番の役目を果たしに歩み寄る。
なるべく低姿勢で。
「あの、今日はどのようなご用件で？　」
「ん？　新人か、セムは？　」
「セムさんは戦争です」
ルグルと呼ばれた男は、年の頃四十半ば、顔に刻まれた皺は渋さをかもし出していた。恰幅はいいが、ゴツイとまでは行かない。
ルグルさんは無い顎鬚をさすり、どうしようかと思案している。
後ろのやつは、年のころ三十前後だろうか、それでも二十代に見える若者だ。一切の無駄な行動全てを廃したような感じだ。微動だにしない。
「じゃぁ、これ預かってくれ、で、帰ってきたら渡してくれ」
「あの、あなた方は？　」
「軍警察第四課国家安全保持武装勢力鎮圧特殊専門部隊通称“朱(あけ)に染(にそま)まる月(つき)”ルグル・ハイムヒュートだ。長いから四課って呼んでるけどな」
「同じく、ラグロス・エルスレシュです」
「はい。承りました」
記憶にもやがかかっているせいか、やけに長ったらしいさっきの名前も、頭の中で呟ける。
記憶力だけは並外れている。微妙な特技を発見した。

それにしても、なんだろう、何か懐かしい感じがした。

彼らは移転魔法の陣に乗って消えていった。確か軍警の本部は王都にあった。ここから五百キロは離れているため、馬車なんかでやってくるはず無い。

こうして街を臨むと、いろいろ気づくことがある。

ここに来て日は浅いが、街を臨んでいると心が落ち着くような気分になる。

日ごと人の出入りが激しい。放置国家の代表として、セムさんは自由に商売が出来る土地を中央通に儲け、他にも、著名な建築家、彫刻家、芸術家もろもろを招き、観光地としても有名になるまでに成長させた。

特に評判がいいのは、有名な物語作家の小説の一部に、ここの土地と、ここの時計台が使われていること、更にその時計台には、本編で語られることの無かったサブストーリーが直に彫られているということだ。

人がごった返す街の中でも、疑問に思う点はある。

あからさまに怪しい二人組みを見つけたとき、そう、正に今僕はその状況にいる。

外套で全身を隠し、フードで顔すらよく見えない。が、ここに向かってきていることは明らかである。

時間は後わずか、僕の立つ教会の階段の一番上を見据える二人は、ゆっくりと歩みを止める。

「本日はどのような……」

「お姉ちゃんを帰せ！」

僕の質問は途中で却下され、変わりに突き出されたのは、不条理かつ意味のわからない要求だった。

「あの、お姉ちゃんってだ……」

「駄目よメミル。教会の馬鹿には言葉は通じない」

今度は馬鹿呼ばわりされた。しかし気にしない。あくまで大人な

態度で挑もうと決心。
「でも、今日は教会の人全員いないんだ」
「嘘！　あの変態ロリコン教祖のやつが、お姉ちゃんを仕事に出すはずが無い！　」
いままでの言葉を整理すると、お姉ちゃんとやらはどうやらケイのことで、セムさんはやっぱりロリコンだったってことだけ。
それと、僕に底知れぬ殺意を抱いていることも、不本意ではあるが付け足しておく。
「メミル構えて、強行突破よ」
「うん。こんなやつ簡単だよ」
知らない間に僕に抹殺命令が下された。
一人ならば、神の力が使える僕のほうが上だろうが、二人ともなると難しいかもしれない。が、ここで引くなんてことは嫌だし、死ぬのも嫌だ。
最後の最後まで、必死に抗ってみせる。
所持武器は、先日セムさんから貰ったハンドガンと、ここの決まりごとを尊重するような、刃の無い南刀。
対して、少女二人は、同じような長剣を持っている。
田舎の生まれの僕とは違い、場数は相手のほうが上だろうと推測できる。
来た。両脇からの強襲。
メミルと呼ばれた方の少女の時をずらし、もう一方に発砲しながら、メミルに空中の胴タックルをお見舞いする。
僕の推測では、地面に落ちた鳩尾に柄をめり込ませて終わりだと思っていた。
それは、やはり間違いだった。
地面が競り上がったかのようなものが、僕の右わき腹を強襲、教会の壁に叩きつけられる。
その間に二人は体制を整え、こちらを見据える。
力なくその場に僕は落ちる。痛みで動けない。

二人は同時に陣を展開、火球が生み出される。
右は階段で、左にしか逃げ道は無かったが、それは相手も予測済みだろうから、ギリギリまで待つことにする。
立ち上がり、逆転の算段を踏もうと考えるが、どうにもバットエンドしか見えてこない。
火球は完成し、僕に向かって飛翔。予想以上に速度が速いが、そのスピードを押さえる。
が、右わき腹の痛みと、肋骨がきしむような痛みに集中が切れ、火球は速度を取り戻し、僕の右腕を飲み込む。
「エミル、こいつは他のやつより弱いよ」
「そうねメミル、でも油断しないで」
その期待に応えられそうに無い、僕はもう満身創痍だった。
立ち上がることすら出来ず、息は乱れ、意識は朦朧としている。

九戒：ラルのお仕事（2）

満身創痍で意識朦朧、この状況を打破する術を僕は知らない。
結末は至ってシンプルだ。それしか見えない。
止めを刺そうと、目の前の二人の少女は再び火球を作り出した。
それはとても早く、死神が近づく雰囲気、死期を悟った生き物のように僕は穏やかだった。
が、火球は途中で静止した。否、世界は色を保ったまま、時を止めたのだ。
『ん？　どうなってる？　戦争の地にはなっていないと思ったのだがな』
地の底からのような声は、あからさまに僕の中から聞こえてくる。誰だろうか。
聞いたことのない声、初老の、老人のような低く透き通った声。
『少年よ、いや、答えはいらないか。力が欲しいか？　ん？　違うか、体、借りてもいいか？』
唐突のことに対処しきれず、僕はそれに希望を見出せず、恐怖が更に体を浸透していった。
『まぁよい、面倒だ、体借りるぞ』
僕はようやく状況を把握。いや、把握しきれていないからこその質問が喉を突いた。
「な、名前は？」
『俺か？　そうだな……ゼル、とでも名乗っておこう。賢者ゼルだ』
そして、時間はもとの時間をたどる……。

火球は青年の目の前で制止する。が、その炎の淫靡な揺らめきは、いまだ健在である。
青年と退治する少女たちは、不思議そうな顔をして戸惑うのであった。

魔法を途中で止めるなど、ありえない所業である。避ける、破砕する。それは至って簡単だが、時を操る魔法など、特攻魔法免許にも禁忌魔法使用許可免許にも無い。だとすれば……。
少女たちはそこで思考を止め、目の前の一見雑魚に見える青年を、いたぶることなく殺そうと決めたのであった。
次の瞬間、青年の目の前の火球は青白く光ると共に、氷のように砕け散った。
「う～ん。なるほどなるほど、悪くないが、至って単純だぁ～」
先ほどまでの青年とは何もかもが違う。少女二人は冷や汗を、悪寒を感じながらはっきりとそれを理解した。
にやにや笑いながら、舌なめずりをする青年。
恐怖のあまりに、殺す以外の答えが見つからず、少女二人は再び火球を生み出す。
青年はそれを見ると、右手を地面と平行の高さまで持ち上げ、指を弾き、音を響かせる。
すると、先ほど同様に、火球は氷にでもなったように砕け散った。
「無駄だ、貴様らの魔力の本質を理解した」
青年の冷ややかな笑いに、少女二人は自分に死相が見えたような顔をしている。
今までに味わったことの無い、絶対的な無力感にみまわれながらも、少女は魔法を放つ。
しかし、少女を離れ、一秒としないうちに魔法は砕かれてしまう。
「メミル、いい？」
「エミル……大丈夫だよね？」
魔法が使えないと理解した少女は長剣を抜き、最初の突撃のように、挟撃に走る。
「メミル！　右は弱点だ」
青年の右半身は、先の戦いで焼かれ、砕かれ、もしかすると破裂しているかもしれない。少女たちはそれを考えていたが、それすら甘い考えだった。

青年の周りが急に加速し始めたのだ。刹那、陣が目に見えない速さで展開を始めた。
治癒陣。だが、その外側に、何か別の陣があつらえてある。
「バカな、陣の二重展開だなんて」
加速している二人に止まるすべは無く、踏み入ったそこは地雷原と化していた。
間一髪逃げることに成功はしたものの、それぞれやけどが激しかった。
青年はそれを、ただただ嘲り笑っていた。
「ん～、つまらないな」
そして青年は再び、陣を急速展開。
「あの少年はこんなにも素敵な力があるというのに、宝の持ち腐れだな」
火傷、恐怖、それらが収束したものに心を支配され、少女二人は地にひれ伏すのみだった。
逃げることも、言葉を発することも、唯一許されたのは、慈悲を請う涙を流すことだけだった。
そして、一陣の風が吹く。
それは竜巻のように渦巻き、少女二人を空という処刑台に誘う。
「せめて厳かに殺してあげる」
一つ目の陣を維持させたまま、青年は二つ目の陣を展開、それでも足りないのか、更に陣は増殖を続ける。
否、二つ目の陣が言葉を放っているのだ。つまりは契約、召還であった。
契約の完了は光が示す。陣が光を帯びて青年を怪しく照らす。
「黒く光り、赤く薙げ、青に染まる血に溺れ、白という名の虚無に包まれ、透明の元へ還るがいい、我が僕エクエスよ、醜き輩を心行くまで飲み干せ」
陣は開放されるように広がっていった。そして、一瞬世界は白に包まれた。

次の瞬間、処刑台に上がった少女たちの目の前に現れたのは、黒き甲冑に身を包む騎士。それは人でなく、その何倍もある巨人のようなもの、手には釘代わりの短剣と槌。

懺悔の言葉も許されず、短剣は心臓へと突き立てられ、槌は弧を描き、同じようにして帰ってくる。

その時、少女たちは気を失い見ることは適わなかったが、青年の後ろにはなにものかの影が見えた。

十戒：ラルのお仕事（3）

目が覚めた。いや、やっと自分を取り戻した感じだ。
賢者ゼルに意識をゆだねながらも、体のどこかに自分が潜んで事の次第を傍観していた。
やっと、自分が自分に帰ってきた。目に映るのは高い天井だった。
「起きたかい？」
優しくセムさんが笑いかけてくれた。起き上がるものの、頭に走る激痛に、再び体は重力に体を任せることになる。
「まだ無理だろうね、二日眠っていたらしいからそろそろ大丈夫かと思ったけど、意外とキツかったんだね」
「あの、何が起こったんですか？　それと……」
質問をどこに投げかけようかと迷った。
殺してしまったか？　眠っていた間僕はどうっだたのか？　ゼルのこと？　それとも、あの襲撃者の事？　ケイちゃんを姉と言っていたこと？
どれもがわからなかった。わかりそうなことでさえわからない。
唯一わかることは、皆戦争から帰ってきて、ここは教会だってことだけ。それと、物凄い腹が減っている。
「順を追って僕が説明するよ、ゴメンね、色々といえないことが多くて」
セムは手招きをする。やってきたのはケイちゃんだった。
「君を襲った女の子たちは、ファーブラという集団のアーラ部隊の一端。
しかし、この国とファーブラの間には停戦と不可侵の条約があった。が、ここは知ってのとおり放置国家だ。それを守る理由が無いんだ。やつらには……。
彼らはアシュなんだ。体のどこかが人間と異なり、それにより人間を嫌いになってしまったやつが、アシュだけの世界を作ろうとし

て作ったのがファーブラ、君を襲った二人組みは教えをそむいてまでも、うちの天使を開放したかったらしい」
「ケイちゃん？　」
「あぁ……」
ケイちゃんは後ろを向いて、服を捲り上げる。
肩甲骨の辺りに、こじんまりとした羽が存在した。
アシュには色々な種類がいて、ケイちゃんのように羽が生えているアシュを、ニクスと呼び、羽は空気中の酸素や魔力を補充する能力があるらしい。
他にも、鱗が体を覆っているやつや、角が生えている奴もいるらしい。
「ありがとうケイ。さて、次だ。君は第三者にのっとられていた。危うく人を殺すところだったけど、軍警のルグルが助けてくれた。
ルグルは僕に用があって、君に手紙を渡した後帰ったけど、君が気になったらしいんだ。
ラル君って、北の出身かな？　もしかしたら、街は子供の時に消滅してないか？　答えたくないなら答えなくていい」
確かに、子供のときに村が焼けた記憶はあるが、やはり曖昧なのだ。
それでも、焼けて、僕一人になった記憶はあったので、僕は小さく答える。
「はい」
「君をそこから助け出したのが、ルグルだったみたいなんだ。
で、それを確かめに来て、君が操られているとわかり、意識を奪った。と……」
ようやく話が繋がってきた。
それでもまだ不思議だった。何故、何故あれだけ強かったゼルさんを、一発で倒せたのかが、不思議だった。
「で、次に憑依魔法の説明だけど、憑依体が出来る行動は魔法だけ、五感は君が所有しているから、憑依者はルグルに気づかずに、ルグ

ルに意識を持っていかれた」
「その人なんですけど、ゼルって知ってます？　賢者ゼル」
「いや、知らないね」
寝ている椅子から見渡せる限り覗くが、誰も反応を見せない。
あれは自分が見せた幻影だったのかと思うのだが、憑依魔法を僕に使用した時点で存在は決定的だった。
「それと、憑依中に使用した魔法が、体に見合わないと、今の君みたいに頭が割れるほど痛くなる」
なるほど、それで頭の中で小さな巨人が暴れているわけだ。
どれほど痛いか、まぁ、ありえないが割れそうな程といえば、一番近い感じだ。
「さて、本題に入るとするか、我々の最終目標、唯一の共通点」
セムさんの顔から笑顔が消えた。
いや、笑顔はそこにありながらも、含まれているものが全て異なっていた。黒く光る瞳は、その中身を語るかのようだった。
濁った笑顔で、セムさんは言葉を紡ぎ始めた。
「それはね、神を殺すことなんだよ」
体が、脳がそれを拒否するような発言に、一瞬と惑う。
どんなに狂っていても、どんなに記憶が曖昧だろうが、それに抵抗を感じる感性は持っていた。
ここは教会で、神に従い、神の命の元、神の代わりに裁きを行う。それがここだと思っていた。
神の力を授かり、神の力を執行し、悪を裁くとばかり思っていた。
少しそれには語弊が生じた。それは、悪というものが、神という不可視の偶像にすりかわったのだ。ただ、それだけなのに……。僕は迷った。
否、迷う必要なんて無いんだ。
今の僕は何も持っていない、何も知らない。奪われてしまっているのかも知れない。
ならば、必要とされる場所で、己の力を生かす何かをすればいい

のだ。それが、ここだってことなだけ、やることが、少し馬鹿げているだけ。
「わかりました。つまり、死んでも文句言うなよってことですよね？」
「ふふ、だんだんここがわかってきたようだね、じゃぁ、実戦訓練も兼ねて明後日に一つ仕事があるんだ。皆も聞いてくれ」
セムさんはいつもの笑顔のまま、紙とナイフを投げる。
それぞれのいる場所の近くに突き刺さる。大したものだと関心しながら、僕もその依頼書の内容に目を通す。
「イスタリアは実戦にグールを投入してきた。
我々は、そのグールだけを殲滅する。いつものように、人間は倒していいが、殺しては駄目だ。
いつもより若干難しいかもしれないが、慎重に執り行ってくれ、出発は二日後、ロキの移転魔法で近くの町まで行って、そこから徒歩だ。質問は？」
「メン、バー、は？」
途切れ途切れの声でロキが質問を述べる。何故だかレイが少し肩を落とす。
「ケイの学校が始まるから、僕とケイ以外だね」
ちょっと待てといいたかったが、セムのロリコンはここでは当たり前なのだ。多めに見てやる。
それよりも、レイが肩を落とした理由が、少しだけ気になっていた。
いや、それよりも更に、頭の痛さに涙があふれてきた。

十一戒：ポルメルワンの戦い（1）

寒い。肌寒いならまだしも、寒い。
北の方の国境だからって、ここまで痛いことはないんじゃないかと、病み上がりの体に響く。
戦争は、はっきりした記憶の中では初めてで、結構バタついているものでなく、嫌に落ち着いていて、寒い以上にピリピリと肌に突き刺さる。
う～ん、肌に合わない。
「お、来た来た」
レイがにこやかなのが怖いが、目を向けてみる。
服装からすれば階級は上のほうだろうと思う。目つきが冷ややかで、勲章は嫌に光っている。
戦争の始まりを告げるのだろうか、と、反応したのがレイだと思いながら予測。
「状況を開始する。C3の諸君はグールの討伐、配置は平原に二体、山林部に十体だ。今日中に片付けて欲しい、細かい部分は諸君に任せる」
「なーなービオルマ、聞く限りじゃ山とられたら終わりってことだな」
「そういうことだ」
「はいはーいっと」
ビオルマと呼ばれた将校さんは、レイの質問だけに答え、さっさと帰っていった。
今回の戦争は、平原をそのまま戦うよりも、地を生かした坂落としがいいと判断したのだろう。
こちらはそれを食い止めるらしい。
触られたら負け、そんな奴ら相手に普通の人間は無力だし、知識的に不十分だと鼓舞にも関わるだろうと、だったら専門家にとのこ

とだろう。
「じゃぁ、ラルを平原に置いて、私とギンが三体、ラウとロキが二体ずつ、ってことで」
「えっ！？　僕一人だけですか？　」
喋ってくれると嬉しいのだが、なんでって顔でこちらを見られると、こちらも反論できない。
「そりゃぁお前、重要なところ任せるなんて、新人には無理だ。だから、だ」
ん～、死ぬ気だけしかしない。
何せ、グールなんて見たことないし、みじん切りにしても生きてるかもしれないんなんて、困る。
一応、セムに陣布（じんふ）を貫っている。
陣布はもともと陣が書かれており、強力な魔法ですら、魔力を注ぐだけで使用できるものである。
今回貫ったのは、重力操作系の魔法で、すりつぶせば速いという結論からだそうだ。
さてさて、さっさと作戦会議は終わり、胸に大きすぎる不安を抱えながら、戦線へと赴く。
緊迫状態が続いているようだが、いつ火がついてもおかしくない、相手も威嚇するように、グールらしきものを最前線に配置している。俺にとっては好都合。
「すいませ～ん、通りま～す」
そんな緊迫感を打破するかのように、俺は人の群れをかき分ける。
状況を理解したのは、将軍っぽい人だけだった。
「よろしく頼む」
「援護は？　」
「期待しないでくれ、君たちの仕事は一瞬だと聞いている、それについてはいけないよ」
「そうですか……」
だからって、僕弱いですなんていえない。鼓舞に関わる一大事だ

からだ。
不安に苦しみながら、更には、期待という重荷が圧し掛かる。
深呼吸を一つ、陣布を確認全部で五つ。二体のグールを倒すだけ、でも、触られたらお仕舞いだよなと、肌の露出している部分を再確認。
「行きます……」
固唾を呑んで見守る、人間に出来ることといえばこれくらいだろう。
秒を進め、拘束されているグールに近づく。それに気づき、敵も拘束を解除、グールの手が伸びる。時を遅め、宙を舞う。
落ち着き払って陣布を頭に置き、魔力を注ぎ込む。
地面には半球を描いたような穴が穿たれ、一触即発と言った様に動きが止まっている。
が、最もあせっているのは僕だ。この数相手に、神の力も糞もあったもんじゃない、緊急退避して、自分の仕事だけに集中する。
もう一体のグールは右の方向から迫ってきている。
そこで一つの仮説を思いついた。
誰かが、グールを操っているのか、と。
グールの腕が伸びて、思考を一時中断。後ろに飛び回避、左フックを右に避けてハンドガンで応戦。
先ほどの仮説があっているものだとすれば、グールの動きの変化に少しだけ納得が行く。少しだけ距離を置いている。そんな気がする。
重力操作系だとわかったのだろうか、空中戦に持っていかれないように配慮している。
だが、それをこじ開けるのが仕事である。
右手が捕捉しようと伸びる、ガントレットとレザーグローブで守られていながらも、少しだけ恐怖がこみ上げるか、その腕を掴んで上へ行く。
なぎ払う左の裏拳を南刀で受け止め、ハンドガンで肩を打ち抜き、

隙を作って頭に陣布を敷き、放つ。
状況理解した兵士が僕に近づくが、神の力を逃避に使用、全速力で、本気で逃げる。
「おつかれ、後は私たちに任せろ」
すこしだけ優越感。満足感。
戦争は始まった。剣戟の交わる音がする、魔法の炸裂音がする。鉄と血の臭いがする。砂煙が目を掠める。魔法で生成した薬品の臭いがする。
僕は、戦争は嫌だと思った。どこまでも不快だった。
だが、仕事は終わった。このまま帰ろう。
そう思った時だった。戦況は一気にひっくり返された。
戦線の部隊の爆撃、立ち込める煙は血と肉の色をしているようにも見える。ふと、怒りがこみ上げる。
「C3よ、いるのだろ？　フィルグ・カラガリアだ、誰でもいい、出て来い」
怒っていたから？　否、多分、僕は調子に乗ったんだと思う。
「僕は、ラジェルタ・ハイデンツァ、よろしく」
男は不適に笑っていた。白く狂気に満ちたローブの奥で、男の口が三日月を描いた。

十二戒：ポルメルワンの戦い（2）

ポルメルワン海岸、北は海で南はいきなり山という特殊な地域、海岸がスフィードからイスタリアにかけて長い海岸線は、たびたび戦争の地になる。

山間部の奪取が今回の鍵となる、いままでは兵を伏す地として使われていたようだが、イスタリアの南の進攻も含め、だんだんと進攻の地を広げ、全面戦争の足がかりにしようとしているようだ。

今回の仕事はグールの殲滅。

セムさんからいただいた陣布で、意外と簡単に倒すことが出来た。

それのせいだろうか、僕は調子に乗っている。目の前の男を倒せると思っている。

何かの魔法で戦場を整然とさせ、C3を呼んだのだ。僕は退く事が出来なかった。いや、退くと言う選択肢を知らなかった。とでも言えば格好がつくかな。

「さ、愉悦を楽しもう」

男は風を纏ったのだろうか、素早い飛翔で間合いを詰める。

魔法で遠距離から攻めれば確実なのだが、こいつの考えていることがわからない。

レザーグローブの拳に描かれる魔法の陣が怪しく光り、避ける僕の横に、炎の軌跡が描かれる。

ローブを纏いながら、動きが見えない腕の乱打が続く。

勿論ながら、僕は神の力を駆使して拳を避ける。反撃できるタイミングは、自分ではわからなかった。

それでも、たまに訪れる隙を見て、南刀を振り、ハンドガンを放つ。が、それも全て避けられてしまう。

殺さなければいい、ならば、腕や足をつぶす程度ならば許されるのだろう。

残った三つの陣布を触り、固唾を呑む。

炎を纏った拳を避け、わき腹、鳩尾、喉などを南刀で突く。
あたっていない筈の自分の腕に、少しだけ痛みが浮かぶが、慣れていない戦闘のなにかだと、軽く見ている。
見つけた。南刀で腕を払い、その腕に陣布を張り、魔力を放つ。
「ふふっ……」
まただ。獲物を見つけたような肉食獣の猛禽の笑みが、ローブの奥から漏れる。
発動した陣布は何故か光りを保ったまま、衝撃だけが遅れていた。
気づくと胸の辺りに、男の右手が近づく。
何故だろう、無性に殺気を感じる。何故だろう、触られてもいない手に威圧を感じる。
駄目だ。逃げなきゃ、わからない何かに浸食されるような気分だ。時を早め、時を遅め、風を纏い飛翔する。
が、それは遅すぎた判断だった。
「死ねっ！」
男の右手から、不可視の衝撃が放たれる。
それはそれは何よりも重かった。全てが押し返される気分だ。皮膚の全てが後ろに引っ張られ、骨が軋む。
それは瞬間だった。衝撃が加えられてすぐ、山の壁面に打ち付けられる。
骨が折れる音がした。臓腑が押され、胃液を吐いた。何よりも、息がしづらく、意識は朦朧とした。
男が近づいてきたのがわかった。死ぬのだなと思わされた。
その時、目の前に誰かがやってきた。声がしたんだ。確か、レイの声が。
「バカ野郎が、お前はどこの自殺志願者だ。ロキッ！」
ギンの剣が男との距離を開け、その隙に退避する。
次に目が開いたのは、やはり教会だった。

十三戒：ポルメルワンの戦い（3）

感覚が、痛みが感じられない。
虚無の闇に閉じ込められたような冷ややかな優しさを感じながら、高い天井を見上げている自分を気づく。
「また……か」
「また……か、じゃねぇぞこのバカ野郎が！」
「でっ！」
頭だけが前と同じように痛みに軋む。
拘束で動けないわけじゃない、死んだわけでもない。でも、体が動かず、痛みは無い。
首は動かせ、体を見るが何も無い。横にはレイがただただ怒っているのが見えるだけ。
「ギンの力で体の状態の悪化を止めている。ギンが飽きればてめぇは死ぬ」
「助けてはくれないんですか？」
「話を聞け」
再び重たい感触が額を襲う。わかってやっているのだ。
「あんたはこの教会の人間としては普通過ぎる。故に、今回のようにバカをする。
今、死に直面している状態で、さっさと約束しちまわないと、いつ死ぬかわからない。死なれると、こっちだって困るんだ」
優しさからだろうか、その言葉にはどこか真剣みがあり、いつもの冗談とは違った。
そんな気がしただけだ。
「処理とか……バラバラにするのは趣味じゃねぇし、燃やす前に腐敗臭はキツイ……」
体験談なのだろう、顔がだんだんと青くなっているのが見えた。
処理が面倒だから死ぬなと、なんとも単純明快だ。この教会らし

い。
「さ、本題に入る。これから約束事をする。守れなかったら戦場に放置、いいな？」
咄嗟に簡単な処理方法を考え出し、それを約束の杭として僕の心に打ちつける。
そこには少なく、簡単な約束が重なっている。
「一、仕事以外のことは、いくらそれが正しくてもやるな。
二、ここの連中は完全個人主義だ、助けようなんてするな。
三、個人主義故、これからはかかりつけの医者を決めろ。
以上だ」
「わかったよ。うん。ごめん、僕が間違ってた……だから、医者くらい呼んでもらえます？」
一瞬露骨に嫌そうな顔をされたが、それについては突っ込まないのもここの掟であろう。
レイに支持され、ラウ君が僕が最初にセムから貰ったものと同じような案内書に目を落とし、適当な医者を見つける。
連絡陣に文字を翳し、魔力を注ぎ、送信する。
数分後、返信の言葉が返ってきた。どうやら大丈夫らしい。
ここで僕が死なないように、その病院へは、ロキとギンが着いて行ってくれるらしい。
僕はギンの力で体を固定されたまま、風の魔法で運ばれる。
ラウ君。できることならば、もう少しましな医者を紹介してほしかった。ある意味僕は、死んだ。うん。気にしない、気にしない。

「ただいま～」
いつでもご機嫌なセムが、人一倍の笑顔を振りまきながら教会に帰ってきた。
今日はケイの入学と、先日ルグルとかいう軍警のおっさんの頼まれごとの返事をしに行ったらしい。お土産は、買って来てくれたので、文句は無しにする。

「あれ？　ラル君は？　」
「他に手ぇ出して全身打撲。ゴーミクっていう特治魔法免許保持者に預けてきた」
「それはまた……。ある意味新しい人生が待ち受けてるかもいれないが、殺生だな、ま、いっか」
いつもなら笑顔で減給だとか言うくせに、なにかいいことがあったか、おかしな性癖が反応したか……後者に賭けるのが正しいだろう。
私はいつものビスコッティとアールグレイを取り出し、いつもの場所でそれを食べる。
いつ食べても、プローウェルビルム軽食店のビスコッティは美味しい。喧嘩の次に好きなものだ。
あそこのオーダーの仕方は、私には不向きであるため、いつも他の人に任せる。
プローウェルビルム軽食店の店主は、いつかの旅行の時に出会った物語小説、フトゥールムに没頭し、今ではそれにとりつかれていると言っても過言ではない。
今では世界的に有名となったフトゥールムの名言や、格言。それを勝手に抜粋し、それをメニューにしている。最初はおかしくなってしまったと、近所の人はバカにしたそうだが、日を追うごとに、何かのゲーム感覚のように人が集まり、今ではこの国で最も繁盛している店と言ってもいいだろう。
もともと店主の飯は美味しかったのだ。そのままでもよかったのにと、少しだけ口を零す。
「あ、そうだセム。報告があったん……」
私の言葉をさえぎるとは、よほどの訪問客じゃなきゃ許さないし、よほどの訪問客だったら、喧嘩を申し込もう。
「シェムルランガー・オリカルテ・トラスコットはいるか？　」
それは珍訪問者にして好敵手。
私は剣を取り、飛び掛ろうとする。

「戦場にクルオルデルタがいたとは誠か？」
好敵手の口から出た言葉に、皆の目線は注がれ、動きが止まる。
一人だけ冷静に、落ち着き払って言葉を放った。それはラウだった。
「うん」
小さく、小さく、それであって重たい言葉が、その場を支配した。

十四戒：記憶の軌跡（1）

「詳しく話してもらえるかい？」
セムは優しくラウに語り掛ける。大してラウは、小さく頷くだけだった。
ラウが私たち以外がいる時に喋るなんて、成長したのだなと親心が疼く。
「ラルさんが無茶した相手、多分クルオルデルタのナンバー2フィルグだよ」
皆黙り込んでしまった。もともと喋る奴が少ないのもあるが、戦争が急速に展開していることに対する戸惑いが、どうしても隠し切れないようだ。
しかし、何故急にこんなことになってしまったのだろうか、整理してみる。
クルオルデルタは、ここと違い、大多数のウィオーゴと同じで国には関わってはいなかった。個人団体として動き、布教を続け、信者を集めていた。
それが今回、どうにも国につくような動きをとっているように思える。
だから、私は少し口を挟んでみることにした。
「単独行動……って線は？」
「いい質問だ。無きにしも非ずってとこか、いや、もっと確立は高いな」
「が、考えられる理由で、それが最も確立が高いと見た。至急第一機関で会談を開く。今後の君たちの活動は、それに準じてもらう」
話がまとまる方向に収束していったのだが、思わぬことに、いや、思わぬスピードで、楽しいものが帰ってきてしまった。
教会の大きな扉を勢いよく開け、バタンと鈍い音が響くが、その音には怒りが満ちているのは承知の上であったが、一つ、おかしな

殺気を感じた。
「ど、どういうことですか、あの人？　もう少しでどこか別の世界に飛んでましたよっ！」
私が冗談だと、冗談にならない言葉を発しようとしたときだった。ありえない声が発せられたのだ。
「貴様ぁぁ！　何故ここにっ！」
やばい、あいつ助からない。
この国で一番強い男、第一機関直属護衛長メーリクラウス・クライフォントに狙われた以上、配置からして、私も、ギンも追いつかない。
が、長らく見ていなかったセムの動きに、私たちは安堵を覚えた。死体処理をせずに済むという点で、だ。

乱された服で教会の扉を開け、見知らぬ人外ながらも、まずは文句をと、大きな声で響かせる。
次の瞬間、その見知らぬ男は、僕になにか恨みがあるかのように発狂し、そして抜刀。
僕は動けなかった。僕は見えなかった。いや、見たくなかったのだ。
その圧倒的な力に、その圧倒的な殺意の前に、その圧倒的な復讐の塊に、僕は目を逸らすことしかできなかった。本当は目の前にいたのに、僕の目は、それを拒否したのだ。
死ぬ。痛くも無いし、辛くも無い。けれども、心というか思考のどこかに、しっかりとした虚無が鎮座し、それは僕を飲み込もうとしていた。それに僕は、飲まれようとしていたのだ。ただ、静かに死ねたら、と。
それを蝕むように、一陣の風が吹く。共に、金属のぶつかり合う音が聞こえた。
セムさんの背中越しに、男の持っているだろう剣と、セムさんの大口径のハンドガンが軋みあっているのが見えた。

どうやら、助かったようだ。
「どけセム！　俺はそいつに用があるんだ」
「穏やかじゃないね、話を聞かせなよ、それと、彼は記憶障害がある、彼は君を知らない」
「記憶……障害？　……すまない。人違いだ」
剣を鞘に収め、僕の横を通り過ぎようとした時だった。僕は、やっと彼の存在を確かめることに成功した。
彼は、ただ静かに僕の横に立っている。
「クラウス、まだ話は終わっていない」
「ここの掟に従えば、詮索はしないんだろ？　聞きたくなったら聞きに来ればいいさ、彼“一人”でな」
クラウスと呼ばれた男は、どこか切なげな顔をしながら、その場を後にした。
僕は、神の力で時を少しだけ操れる。
だが、今回の一件については別だ。死ぬかと思った瞬間は、今までで一番長い一瞬となっただろう。その性か、寿命が縮まった。そんな気がする。
この一件があってだろうか、セムさんからのお咎めは無かった。

十四戒：記憶の軌跡（1）（後書き）

今更ながら読者数の存在に気づきました。
なぜだかロキの物語がずば抜けてるのは、気のせいでしょうか？w
w

十五戒：朱に染まらずとも……（1）

「ねぇ、本当のことを教えてくれない？　」

朝日が直に差し込む窓から、今日の始まりを眺める男の背中に、今までオブラートに包むほど大切にしてきた事実が、破られ、突きつけられた。

男は四十半ば、恰幅がいいところでは若いが、口と鼻の間に生えた髭と、目や眉間に出来た皺は、年を感じさせる。手に持ったマグカップのコーヒーが、微かに揺れた。

その男に質問を投げかけたのは、二十後半の、どこか落ち着いている女性であった。背は普通くらいであるが、男と並ぶと小さいとしか言い様が無い。

そんな二人は、沈黙と嘘で会話をするのだが、女性はそれを上手く交わし、真実を確かめようとしている。

「う～ん。知らなくていいって、わからないかな？　」

「わかるわ、でも、知りたいってこともわかってよ、一体何年一緒にいると思ってるの？」

男はこういう状況には慣れていなかった。

職場での彼の立場は、生粋のサディストで通っていて、他の職場の女性は彼のとりこであり、その職場では、彼の奴隷志願者が列を成すとか、本人に自覚が無いところと、所帯持ちであるが故に、女性たちはかなわない夢を追っていることが明白である。

勿論のこと、職場の男性人からはよく思われていない。彼女を、妻をとられた奴が何人もいるからである。

話を戻すと、男は質問と、隠し事が苦手なのである。

「ほら、やっぱりだわ、貴方嘘をつこうとすると笑顔になる癖、いまだに直ってない」

「……。わかったよ、言えばいいんだろ？　」

「そう、それでいいのよ、さ、教えて頂戴、ラグロス・エルスレシ

ュについて、あの、戦場の死神について……」

それはその職場には恐ろしく珍しい出来事が起きた三ヶ月前のことで、発端は一つのノックだった。

女性が扉を開けると、扉の向こうには第三権力の軍人が三人。訪問客すら珍しいのに、わざわざなんなのだろうと、不穏な予兆だと男は思い、女性に変わり応対する。

「第二権力からのお達しだ。君たちの部隊に、新人が一人入ることになった」

「え？　」

軍警察第四課国家安全保持武装勢力鎮圧特殊専門部隊通称“朱(あけ)に染(にそ)まる月(つき)”は、殉職の多さ、給料の悪さ、保険の悪さなどから、軍の中でも一番人気の無い部署である。

人気の無さを物語るように、今この場での四課メンバーは、私ことルグル・ハイムヒュートと、エマ・クロードの二人だけという奇跡が起こっている。

我々の主な任務は、民間が対応できないほどの事件が起きた場合の対処、つまり、戦争でお留守の時の軍の番犬なのだ。

創設からの殉職者の数は、途中で数えるのを止めた。故に、誰がここにいたのかなどもわからなかったりする。

そんな四課に入ろうとするのは、とんだ気違いか、バカか、アホ、或いは軍のモルモット。

最後の選択肢が一番近いであろう、でなければ、第二権力が命令など出すはずが無い。

「ラグロス・エルスレシュ……これが彼の経歴、そして、カルテだ」

「これは……」

未発達型解離性同一性障害。

解離性同一性障害は多重人格で、その手の事件を請け負ったこと

もあるので許容範囲内であるが、その前の“未発達型”というのが、どうも気になる。
「病気については専門のやつに聞け、今日の午後四時、王都東にある精神病院に迎えに行ってくれ」
「あぁわかったよ、特別手当は？　」
「そのことだが、長年がんばってくれたこともあって、第二権力の力を持って給料は倍だそうだ。羨ましいよ」
なんだか急に第二権力が許せる気がしてきたが、経歴を見る限り、あまり嬉しくは無い。
“戦場の死神”ラグロス君の通り名で、それはそれは凄絶なものだったらしい。
戦場での立ち振る舞いは、味方、敵関係なく薙ぎ倒し、たまに民間人にまで被害を及ぼす彼は、血しか求めていない死神として、誰からも恐れられたとのこと。
あまりにも傍若無人すぎる態度から一度は国に捕まり、幽閉中に態度が一変、おかしいと思った第三権力が精神科にて診断を行った結果、先に上げた病気とみなされた。
しかし、第二権力はそれを正しい形で戦力に出来ないかと思案。そして、この第四課で社会復帰と準備運動をさせようと、そういう魂胆らしい。やっぱりむかつく。
「ルグル、話は終わった？　」
二部屋しかない第四課の奥の部屋で、エマは私の始末書を書き終えた。いつものことに文句は出てこない。
「あぁ、新人が来るそうだ」
「あら、ご愁傷様ね、で、どんな子？　」
「戦場の死神だってさ……とりあえず、迎えに行ってくるよ」
「気をつけてね」
私を憂いてくれたのか、優しい声でエマは言う。
「心配するな、大丈夫だ」
「そうじゃなくて、貴方がスカウトしに行った人間、八割廃人にな

ってるから、相手を心配したのよ」
「あっそ」
私は可愛げの無い後輩に、可愛げの無い返事で返し、可愛げのない新人を迎えに行くことにする。
王都と一括りにしても広く、徒歩で東の果てまで行くだけで、いったいどれほどかかるだろうか、移転魔法が普及してからは気にしたことも無い。

精神病院とは何故こうも陰鬱なのだろうか、不のオーラを感じる。
嫌な思い出しか詰まっていない思い出の病院に入り、院長室を目指す。勿論新人のカルテに書いてあった病気のことで、である。あいつと世間話など真っ平である。
礼儀としてノックを三回。
「入りたまえ……おや、まさか訪問客が君とはな、存外だよ」
「心外の間違いじゃないのか？　おっさん。っと、これについて教えてもらいに来たんだ」
カルテを机に叩きつける。
首から提げたメガネを拾い、私より年をとっているジジイはカルテを凝視する。
「ああ、これかい……そうだね、平たく言えば、意味不明で」
「それでは説明になっていない」
自分で書いたくせに、ジジイは不思議そうに宙を眺めて止まる。
「ん～、人格を一つの球体とし、解離性同一性障害はその球体が分離し、それぞれの人格を形成する。今回の未発達型解離性同一性障害は、それが分裂をしていないのに、さまざまな人格が垣間見えるのだよ。
そう、言うなれば、脳でなく反射的にその場での人格を変換するような感じだ。ある者には服従を近い、ある者には殺意を抱き、ある者には慈しみを覚える。しかし、そのどれもが不安定で、環境による変化が最も有力だと見られた」

「要するに、固定された環境の中で、人格を固めろと」
「その通りだ」
このジジイはいつでも答えを回避し、遠まわしに答えを私に見せる。じれったいのは嫌いなのだ。
「さ、とっとと持っていってくれ、こっちも対応に困っているんだよ」
どこまでもむかつくジジイだ。私は無視をすることに決め、礼も言わずに部屋を出た。
収容棟の端の職員出入り口、そこで囚人の受け渡しは行われた。全身は拘束具に繋がれ、息をするのが辛そうだ。
看守は一つ一つ拘束を解き、最後に腕の拘束を解くと、決まり文句を吐いてとっとと建物の中に逃げるように消えていった。
「なんだ？　てめぇ？　」
「今日からお前の上司だ。よろしくな」
「ふん、知るか、俺はもう自由なんだよ」
「待てっ」
ふてぶてしいが、確かにこいつは血の臭いと殺気にまみれて、感情に乱れが感じられる。
大胆にも私を殺そうとしている。私は体で教えてやることにした。それが私のやり方だからだ。
大きく伸びをし、だらっと腕を下ろす。そこから斜めに拳が上げられるが、右足で軌道をずらし、そのまま右足を地面につけ、それを軸に左足を首の手前で寸止めし、主従関係を明白にする。
「わかったな？　」

「そして、今に至るってわけ」
すっかりさめたコーヒーをすすり、朝日が目を完全に焦がす前に、部屋の中心のエマへと目を向ける。

そこには、すっかり何かを疑ったエマの姿があった。
「大体わかったけど、貴方その時笑ってたでしょ？　」
「何故？　」
「貴方の一人称が私になってた。嘘をつくときの癖、その二」
笑うしかなかった。どうやら色々と彼女には筒抜けらしい。俺は嘘を止めようと決意する。
「教えてくれてありがとう。彼の心が環境に左右されるなら、私はきか無かったことにして、いつもどおりに接するわ」
「そうしてくれるとありがたい、それと、コーヒーお願い」
エマは無言で奥へと消え、コーヒーを温める音が聞こえる。
朝日はすっかりあがって、街は動き出す。窓の外には鳥がここぞとばかりにさえずりあっている。
実にすばらしい日だと、俺は一ついいことを思いついた。
その時だった。ラグロス君がいつもの時間に出勤、いつもより早い俺たちに、少し疑問符を浮かべている。
「ラグロス君もコーヒーいる？　」
「あ、頂きます」
いつもが始まる。彼女の行動に不自然は感じられず、胸のつかえだけが取れていた。やはり、嘘はよくない。
先ほど考えていたことを、少し言い迷った俺を攻めながら、改めて言葉を紡ぐ。
「そうだラグロス君。今日家でパーティーでもしないか？　歓迎の意味でね」
「あら？　私の時はそんなものありませんでしたよ」
皮肉めいた笑みと、コーヒーが届く。
「じゃ、君のも兼ねてだ」
「お断りする理由もありませんので、お言葉に甘えさせていただきます」
ラグロス君の屈託の無い笑顔を見るたび、彼の病気の存在が怪しくなってくる。

最初、一番最初に会ったときの彼の殺気は、やはり感じられない。
消えないはずの、血の臭いも、だ。

十六戒：朱に染まらずとも……（2）

私が入ってから、給料はいつもの二倍になったというが、それでも、危険を伴う仕事としては少ないほうだと思う。

しかし、ルグルさんはどのような人生を送ってきたら、こんな豪邸に住めるのか、今はその疑問だけで手一杯である。

第四課の仕事だけだと、一生働いても無理目だろうと算出、その前に何かをやっていたのだと考えるが、どうも嫌な想像しか出てこない。私の中での彼は、どうもそういう危ない人に設定されているのだと、なんとなく思う。

「口半開きにして家を見られるのは、いささか嫌なもんだな」

「あぁ、すいません。なんだか見入っちゃって」

「なにせでかいからな」

「エマ、そこはお世辞でも綺麗だとか、品が感じられるとか、そういう言葉を選ぼうね」

エマさんは少し機嫌が悪いのか、不貞腐れている様にそっぽを向く。

少しだけたじろぐルグルさんを見れたので、何も文句はつけない。

「さ、サニアさんの飯だ～」

心の中の素直な声が漏れていると、少しだけ注意してやりたいが、注意する前に同じ言葉が出てきそうで怖い。

そのため、最善の注意を払い、ルグルさんの後に続く。

見た感じ掃除はちゃんとされており、欠点を探すことなんて出来ないくらいの家である。

奥の扉から、一人の女性が姿を現す。

「あなた、せめて二日前には言ってくださらないと、満足な準備ができませんよ」

「大丈夫、大丈夫、そこまでの客じゃない」

否定せずに笑顔で対応。

まさか、こんな若い女性がルグルさんの奥さんなのでしょうか、そして、これは何かの犯罪に引っかからないかと、頭の中を高速検索をかけるがひっかからない。思わず舌打ち。
エマも先ほどとは打って変わって、笑顔で挨拶を交わす。
「で、サニア、子供たちは？　」
「お兄ちゃんは第三召集命令で動けなくて、お姉ちゃんはお仕事次第ですって」
「クレオは？　」
「部屋で勉強してるわ、あの子また一番よ」
一通り夫婦の会話を交わすと、ルグルさんは着ていたコートをサニアさんに渡す。
そのままルグルさんは二階へと、私たちはリビングへと通される。
「何かお茶にこだわりとかあるかしら？　」
「お構いなく」
落ち着かない。
一人暮らしで、ご飯もまともに食わず、部屋もまともに片付けない私は、このような綺麗で、豪華で、輝く場所は苦手である。エマは、何度か来たことがあるのか、冷静を保っている。
数分すると、紅茶が届けられる。
華美なティーポッドから、カップに注がれる。香りたつ湯気から、ダージリンだと推測。私は、砂糖を少しとレモンを浮かべ、それを少し口に含み、平常心を取り戻す。
「ダージリン……そうですよね？　しかも、南東にしかない希少種ですか？　」
「あら、エマちゃん詳しくなったわね」
「いえ、まだ銘柄までは……」
希少種という言葉から、また手が小刻みに震えはじめる。
カップを置いて空気を吸う。少し落ち着く。
階段を下りる音、二階からはルグルさんと、そのお子さんの姿が見える。まだほんの子供だ。

「クレオ、挨拶」
「クレオ・ハイムヒュートです。よろしくお願いします」
それは私に向けられた挨拶だとわかり、急いで立ち上がり、挨拶を返す。
「ラグロス・エルスレシュです。こちらこそ、よろしくお願いします」
隣からは、格式ばった挨拶に、サニアさんが笑いをこらえていた。少しだけ顔が熱くなる。
「ラグロス、敬語はよせ、相手は子供だぞ」
リビングに、優しい笑い声が響くと、顔の熱は温度を増した。
サニアさんは食事の準備とキッチンへ、それを手伝いにエマも席をはずし、つまみ食いをするべくルグルさんは行ってしまった。
自然と遊び相手を見つけたクレオ君は、私の隣へと座ると、手馴れたように、紅茶に砂糖とミルクを注ぐ。
「なぁ、クレオは頭良いのか？　また一番なんて言われてたぞ」
「一応ね、記憶力がいいだけだよ」
謙遜だろうか、それとも、実際にそうなのかは、難しい年頃故にわからない。
だけど、嘘ではないとはわかる。どこか、少しだけ、寂しそうな目をしたからである。
「じゃぁ、将来はどうするつもりだ？」
「将来？　まだまだ先のことだよ、なれたとしてもきっと第三権力補佐くらい、今は競争率高いからね」
頭が良い、記憶力が良いというのも、一概に最高の能力だとはいえない。見てもいない上辺だけの現実が、目の前から離れないからだ。
だから、先輩としてアドバイス。
「低いな」
「え？」
「目標だよ、いっそ王様って言ってくれたほうがよかったな」

「無理だよ、だって……」
私はその言葉を断ち切るように話す。
「その考えが甘いんだよ、いいじゃないか届かなくても、飛べよ、とりあえずさ。それで手が届かなくても、手がどこまで伸ばせたかはわかるじゃないか。
でもな、小さい目標立ててそこに飛ぶなんて誰にでもできるんだ、自分にしか出来ないことやらないと、損だぞ」
大人ぶって、少し大きいことを言ってしまったともう。もとい、恥ずかしいことを言ってしまったと思う。
残りの紅茶を飲み干し、その場を逃げようとした時、私の袖はクレオに引っ張られたのだ。
連れて行かれた先はクレオの部屋。机を開閉し、何かを探しているようだ。
「あった……」
静かに呟き、クレオは小さな紙切れを私の前に差し出す。
「じゃぁこれ、特攻魔法免許。つい最近、最年少の十六でとった女の子がいるんだ、僕まだ十二だから、追いつけるかな？」
どうやら、私の一言から小さな、それでいて大きな少年の夢を、肥大させ、勇気を与えてしまったようだ。
が、悪いことではない。少年の夢は膨らみ、それを受け止める自分を形成できるし、将来への足がかりとなる。大きくなって四級で止まりましたより、小さくても四級持ってるほうが、痛みが段違いである。
そして、少年は更に事を進める。
一階に戻ると、パエリアの海老をつまもうとするルグルさんの肩を叩き、私に見せたように、父に報告をする。
「お父さん。僕特攻魔法免許取るよ」
「あぁそうか、それはよかったな、家庭教師をつけてやるから、少し静かに……」
少年はさっきのように、また瞳に悲しみを携えながら帰ってきた。

私を無視したように、大事にとっておいた筈の新聞の切抜きを丸め、壁に投げつけると、悪態を吐いたのである。
「駄目だ。駄目なんだよ、こんなんじゃ、糞っ！」
その変貌のしかたに、人間に対する消化不良を起こす。
彼の瞳の悲しさの含有成分は、彼があそこまで必死になって夢を語ったわけは、そして、それすら通過点でしかないような、彼のあの態度は、誰にもわからないままである。
その後の食事では、さっきの悲しみは、優しさのオブラートに包み、心の隅に隠したクレオが、舌鼓を打っていた。少しだけ、寒気がした。

十七戒：女王という重み（1）

荘厳なつくりの部屋、西日を少しさえぎるようにカーテンを引き、まぶしそうに外を見つめる。

町並みは整えられ、少しだけ上からの優越感に浸る。子供たちの声は聞こえないものの、豆粒ほどの小さな何かが動くのがわかる。

そんな和んだ雰囲気をぶち壊しにきたのかどうなのか、それは定かでないし、本人は仕事なので許そうと思う。

私は百八十度回転し、窓の淵に手を置き、仕事を終えに来た男の話を聞くことにする。

「状況を報告しろ」

「はっ、南、北からの兵は、主戦をする前の足がかりであり、それを考えればアイゼンヴォルグの働きは、国に大きな利益をもたらしたと思います。

今後、グールの一般投入が始まれば、こちらの不利は否めません。アイゼンヴォルグに教授を受けては、と思いますが、いかがなさいましょう」

少し考えてしまう内容だ。国としては、教会を完全に認めては立つ瀬が無い。

だからといって、意地を張って兵を殺すなんて駄目なことだ。

「グールの対処法はわからないのか？」

「はい、被害の広がる前にアイゼンヴォルグに連絡しましたので……」

最初のグールを倒したのはセムだった。

突如不死身のグールを殺し、私に直接謁見し、教会を建設して今に至る。

故に、国がグールに関わった事例は無い。つまり、国は知識がないわけである。

そのため、さまざまな政策をとった。あの街を独立させ、協会を

敵視させるようにしたが、やはりグール討伐はセムにしかできず、金をせしめ取られ、街は今ではこの王都に次ぐ発展を遂げている。
「次……次グールが戦場に投入されたとき、お前たちで真相を確かめろ、兵を無駄に殺すのも、教会に屈するのも嫌だ。だから、お前に全てを任せる。どうだ？　」
「やり遂げましょう、やってみせましょう」
「死ぬなよ……」
「はい……」
この部屋は、七重の物理障壁と七重の魔力障壁をあわせ持ち、近くに移転方陣が置かれている。
それで彼はどうにか納得してくれたのか、今日は一人にしてくれというわがままを聞き入れてくれた。少しだけ気になった、彼の最後の言葉に秘められた嘘、それに気づかない私ではない。
それでも、彼はそれを話そうとはしない、触れようとすると逃げてしまう。
私は仰々しくあつらえられたベッドに倒れこみ、ふかふかの枕に顔を沈める。
私が生まれたと同時に母は死に、十二の時に父が死んだ。
父は民に慕われた王であり、先代の意思を告ぎ、良き国を作り上げてきた。そんな国を盗ろうと画策した第二権力は、私を父の葬儀の次の日に即位させた。
が、わたしは即位と共に自分の政策を進めた。
現状維持をし、新たなことをすることを止める。それは、私が十五になるまでの三年間、国民の前に出て公言した。
それまでが大変だった。三年間第二権力の刺客に追われ、地方視察に行った際も、夜寝ているときでさえもだ。
私がメーリクラウス・クライフォントと出会ったのは、十四の時、刺客が私を狙いやすい、イスタリア国境付近のことだった。
従者を十人従えて、国境を視察していたとき、十五になるまえに殺さなければといわんばかりに、数で勝負を挑んできた。

勿論従者は全滅。私は殺されることを覚悟したが、風を薙ぐ旋律が聞こえた。
それがクラウスだった。
クラウスは体中に傷を負っていて、正に満身創痍という風貌だったが、三十余りいただろうか刺客は、全員倒されてしまったのだ。
「大丈夫かい？」
何も知らないクラウスの、最初の一言はバカみたいだった。
傷を負っているのは彼であり、死にそうなのも彼である。やはり、彼は倒れた。傷の痛みからか、それとももっと別の理由か、私にはわからなかったが、視察先の砦に運んだ。あの時の重さは忘れない。
国に帰ると、彼は私の護衛として働き始める。
そして、私は第三権力を設立し、アイゼンヴォルグを認め、内政を重視させた。
そう、あれはいつの頃だったか、クラウスは、二人の女性を担いで帰ってきて、私の護衛にしないかと持ちかけたのだ。
二人はクラウスと同じようなところで、同じような傷を負って倒れていたため、親近感が生まれたそうだ。私は嫌とは言わなかった。
皆に支えられてここまで頑張って来た。嫌なことも、皆がいてどうにかなれた。刺客も怖くなかったし、市民からの非難も受け止めてきた。
だから、一日くらい休ませてくれ、数時間だけでもいいから、ゆっくりと、休ませてくれ。
声を殺し、落ちる涙を全て受け止めさせ、私は何時間も何時間も、顔を埋めて泣き崩れた。明日から、またいつものように頑張れるように、近くに戦争が起ころうとも、芯がしっかりと曲がらないように、今日だけは泣かせて欲しい。

十八戒：女王という重み（2）

朝食にはサーモンのムニエルにシーザーサラダ、それにオレンジペコが飲みたい。

昨日は王女である身でありながら、護衛を拒否し、今日はその護衛にお使いを頼んでいる。端的に言えばわがままなのか、それでも俺は、彼女に依存するだろう。

まるでクッションのように使っているのはわかっているし、それはいけないことだとわかっていても、必要とされる。それだけで、俺は生きていけるのだ。逆に言えば、それでしか生きていけないのだ。

と、バカみたいに感傷に浸ってないで、早くお使いに行かなくてはと、足を急がせる。

「第一権力直属護衛、メーリクラウスだ。門を開けよ」

第三権力七課、交通専門部署で、移転方陣を借りてプローウェルビルム軽食店までの陣を借りる。

移転方陣は、こちらとあちらを繋ぐだけで自由が少ない。が、それを制御し、管理しているのが七課で、わざわざ朝食を買いに使わさせていただくのだ。

軍の所有地に移動し、そこからプローウェルビルム軽食店を探す。少し南だと思い出し、歩みを速める。

人だかりを見つけると、そこがプローウェルビルム軽食店だとわかる。大した繁盛だと感心する。

と、その列の一番前に見知った顔がいた。確かＣ３の……レイちゃん、だっけ。

うろ覚えながら近づき挨拶をする。

「レイちゃん、だっけ？　」

「あ、クラウスさんだ」

注文を終えたのか、こちらに目を走らせ、隣の少年もこちらを見る。見ない顔だ。
俺は割り込む形で注文を述べる。
「おやじ、ついでに、黒き瞳の池に浮かんだ聖女の微笑みに……」
この注文を覚えるのに半年ほどかかったし、始めの仕事として覚えさせられた。
あのフトゥールムとかいう物語は好きではない。説明はできないが、ともかくあれは嫌いだ。虫唾が走る。しかも、まだ完結していない。
「あ、あの……」
「いいよ、俺がおごるよ」
少しだけ借しを作っておいて、後でセムの鼻にぶら下げてやる魂胆だ。
「それより、その子は？　」
「あ、私の家庭教師先のクレオ君です」
「クレオ・ハイムヒュートです。よろしくお願いします」
「メーリクラウス・クライフォントだ」
ハイムヒュート、確か第三権力四課にいたやつに似ている気はするが、だからといって何かがあるわけじゃないので、考えるのは止めにする。
商品を受け取ると、レイちゃんとクレオ君の分を渡して、少しだけ世間話をすることにする。
「家庭教師……って？　」
「魔法の勉強で、特攻魔法免許とるからって」
レイちゃんは、史上最年少にして、特攻魔法免許を取得したいわば天才だ。
セムという檻に囲まれたレイちゃんは、それでも笑顔を絶やさずに頑張っている。
とにかく、俺の中での位置づけをはっきりさせよう。セムは極悪で、他は普通で、才能ある彼女は善である。

「ん、時間か……じゃぁこれで」
「さようなら」
紙袋を抱えたクラウスさんの背に挨拶を投げると、それに答えるように手をあげて挨拶を返してくれた。
クレオはどこか不思議な顔をして、そんなクラウスさんを見つめている。
「彼何してる人？　」
「第一権力直属護衛だよ」
「えっ！　……だって、えっ！？　」
気が動転しているようだ。
私は子供の頃から神の力を持ち、セムに出会って特攻魔法免許をとり、セムの関係で女王様や第二権力の五賢老院に会ったりと、感動は既にし終わっていて、これが正しい反応かと再確認。微笑ましい。
「じゃ、行こっか」
私が提案を持ちかけると、すぐにクレオ君は移転方陣を展開し、家に直行する。

「おそーーーい」
おやおや、女王様はご機嫌斜めのようだ。
そりゃそうだ。少し寄り道をしてしまったから、遅くないわけがない。
「すいません。お食事の方は冷めておりませんので、どうかお許しを」
「なんだよ、いつもより仰々しいな、気持ち悪い」
王女の真正面に座るガブリエルが、催促する目をわざわざ変えて、俺へ侮蔑の目を向ける。
私は気にしないようにして、王女の右隣へと座る。

「わざわざプローウェルビルムじゃなくても、ここのコックに任せればいいものを」
「貴方はお腹に入ればなんでもいいのでしょ？　私たちは繊細なの」
私の目の前に座っているクヒトは、淑やかに私をけなし、早速紙袋を破る作業に取り掛かる。
それを見る限り、ここにいる女性は、誰も繊細さなんか持っていない気がする。
が、それすら気にしない私は気配りさんだと、自己解決をしておく。
「さ、会議、会議」
食事の準備をせっせとしながら、王女は会議を開くなどと言っている。
今回の内容は、王女として何か鼓舞になるようなイベントを催すことと、戦線のこれからの方針、更に、最近起こった第二権力五賢老院殺人事件について、だ。
三人の女性は食事にがっつく。
「っと、お祭りやりたいんだけど……おじいちゃんがやった、新人祭り？　ってやつがあるから、それやろうよ」
「賛成」
「私も賛成」
ここでの多数決は意味を成さない。いや、少し語弊がある。私の意見が通らないだけだ。
「じゃ、それはクラウスと私で、戦線についてはガブリエルで」
「は～い」
肉に噛り付きながら、ガブリエルは手を上げる。
私は皆にわからせるために、上品に食事をしてみるが、誰も気にしていない。だんだん虚しくなってきた。
「ってことで、クヒトちゃんが第三権力と教会に、事件の究明よろしく」
「報酬どうします？　」

「前金百で、成功により上限は千まで出す」
第二権力五賢老院というのは、この国の政治を司る施設で、最初は王女暗殺に精を出していた。
今となっては、王女の活躍と人望にあやかろうと、媚び諂っているこの世の縮図のような奴らである。
何故彼らの事件に、王女が必死なのか、それは至って簡単。
政治が面倒だから。
「戦線は中央寄り、上部は薄め、陣を広く敷け」
「じゃ、私はお先に～」
最初にガブリエルが、マンゴージュースをすすりながら部屋を後にし、クヒトが後を追うように退室した。
食後のドルチェを堪能しながら、私を見て笑っている。嫌な予感。
「で、私はそのお祭りに関して、何をすればいいんですか？」
「よくぞ聞いてくれた！」
輝く目は漆黒に光り、ドロドロと何かが流れるような、グツグツと策が煮込まれるような音が聞こえる。
「これを国中に配って来い」
「はぁ！？」
その紙の束は、手で持てる域を越していたし、国中てどういうことですか。
そんなささやかな疑問でさえ受けてもらえず、私はなれない雑務をこなすのであった。

十九戒：ラルのお仕事（4）

通信機や移転方陣により、生活が大きく変わり、僕は町をゆっくり見て回っている。改めてみてみると、賑やかで、平和で、笑顔にあふれていて、居心地がよかった。

でも、自分がここにいないと思い出すと、心に穴が開き、隙間風が胸を傷つける。

それでも上辺だけ笑って、記憶の戻るその時まで生きていこうと思う。

だけど、人ごみはやっぱり苦手である。笑い声が聞こえるだけで吐き気がするし、眩暈がする。この空間が嫌だ。

教会に戻ろう、互いに干渉しあわないあの世界に戻れば、僕の居場所はあるんだ。わかっている。どこにも、僕の世界なんてないってことは、わかっている。

教会を見るとホッとする。

バカみたいにでかくて、隣には墓地が並んでいるし、中には人間の末端のような人達がいる。仲間のように思うのは失礼だろうが、自分の中の位置づけだけなら許してくれるだろう、心に穴は開いたままだが、風は吹かず、落ち着いている。

「けって～い！」

初っ端から何かを決定されたが、まずは気にせず歩みを進める。

「セムさん。ちゃんと説明お願いします」

「第三権力からの依頼だよ、小遣い稼ぎにいってらっしゃい」

人選は至って簡単。教会に来てしまった奴。

僕と、ラウと、ギンさん。

ロキさんの陣に乗せられ、依頼書を持たされ、笑顔で見送られた。

そう、強制的ってやつだ。

「っと、動物の凶暴化、進化か何かでしょうか？」

「……」
「……」
おっと、一人は人間不信で、一人は寡黙すぎる童顔おっさんだった。
直球過ぎる質問しか反応しない、曖昧な質問なんて、門前払いである。
依頼の村までは三キロの道のり、手前の村には移転方陣があったものの、ロキはこんな辺鄙なところまでは設置していないらしい。
「ギンさんの神の力って、何なんですか？」
「……空間に留めるんだ。物体だろうが、斬撃だろうがな」
「ラウ君は？」
応えないだえろうと思っていた。故に、以外だった。
「嗅覚が発達し、様々なものを嗅ぎ分ける」
そう、彼は彼なりに成長しているのだ。克服しているのだ。
少しだけ、じんわりと心に親心が広がりながら、目標の村まであと少しだと看板が伝えてくれた。
村の前では、村長があたふたしながら待っていた。
「第三権力からの依頼で来ました。C３のラルと申します」
「あぁ、よく来てくれました。こちらへ……」
額に脂汗をかいた小太りのおっさん……もとい、村長さんは、自らの家であろう、山の中にしては豪奢ないえに案内する。
木の香りが鼻をつき、なれないうちは臭くてたまらないだろうが、僕はなんだか落ち着く臭いだと思う。
安っぽい紅茶の臭いがした。
スプリングが弱まっているソファに腰を沈め、村長の話を聞く。
ギンはソファを気にして壁に背を預けていると、何かに気づいたように呟く。
「ここには温泉があるのか？」
「あ、はい。少し奥の方になりますが、大浴場が一つ……」
「ラル、任せた」

ここで村長が変貌し、悪魔にでもなったらことだが、今は話を聞くだけなので、ギンの行動は許す。
「ギンの故郷、東極にも温泉があり、ノスタルジアに浸っている」
ラウが呟く。
そうか、ラウは経験上正しいと思ったことを述べるのか、そう解釈する。
村長に急かされたので、仕事の話とする。
内容はこうだ。ある時農夫が農作業をしていると、いつものように山猿が降りてきた。いつものように作物を食べに来たのかと思っていると、いきなり爪で引っ掻かれた。悲鳴が響き、村人が猿をどかすまでに、農夫の顔は見るも無残な姿になっていた。
その後数時間、猿は暴れまわり、いきなり豹変したかのように落ち着き払い、いつもの姿に戻ったという。
「ラウ、どう思う？　」
「暴れている最中の獲物を捕まえなければ意味が無い」
「で、村長さん、最近凶暴化した動物は？　」
「毎日現れるのですが、今日はまだ……」
すると、図らずとも外から叫び声が聞こえた。
外に出てみると、狼の群れが涎を撒き散らし、目は血走っている。あからさまにこれだ。
僕は陣を急速展開し、縛鎖を呼び出し一匹を捕らえる。
「ラウ君、他頼んだ」
人を遠隔操作し、強烈なガスを発生させ、失神させる。
僕は縛鎖を解き、狼と対峙する。採取するものは、唾液と血と毛、くらいだろうと思う。
薄皮を剥ぐように、凶暴化した狼の唾液、血、毛を採取する。採取すれば用済みなので、ラウと同じガスを発生させ、気絶させる。
「で、どうしよう……」
少し落胆しながらも、ラウが採取したサンプルを僕から奪取すると、徐に臭いを嗅ぐ。

「血に興奮剤、刺激剤、のような成分が見られるが、自然に取り入れられる量を大いに超えていて、一動物に投与される限度を超えている」
「それは人為的なもの？　」
ラウは、無表情にある一点を指さす。その方向だけは止めて欲しかった。まさか、それは無理だろうと思ってしまう。
そう、温泉。
そして嫌な音がする。爆発するような、破砕されるような、そんな鈍い音だった。
「村長さん、村人全員連れて、急いで逃げてください」
「何なんですか？　いったい」
「いいから早く！　」
村長は更にあせりながら、逃げていくのが見える。
僕とラウは、ただ一点を見つめて、どうしようかと考える。ラウは答えを出しているだろう、無理だってことを。
「無理だろうけど、やってみるか」
「そう、いうなればバカ」
「悲しくなるから止めてくれ」

時間を遅らせ、時間を走らせるも、着いていくのがいっぱいで、攻撃の手が加えられない。
刀を近くに置いていなくて正解だ。拳対鉄と銃で、これだけの差があるのだから、刀なんてあった時には一たまりも無い。
拳を受け、ハンドガンをわき腹に叩き込み、後方のラウに魔法での支援を頼む。
その支援に魔法を加え、僕は後退し、ラウと前後を後退する。
荒々しい攻撃を全てかわし、傷口を抉るような攻撃を繰り返す。傷の再生に細胞が追いつこうと、体の中の刺激剤が使われるため、効果的だという。
そこから生まれた余裕か、それにより冷静になってきたギンの強

さか、一つの拳がぶつかりそうになる。
すると、僕の体は勝手にラウをかばっていた。そうだ。雑魚で地に這い蹲る役は、僕が一番にあっている。
「あ～やっぱ無理だわ」
投げられた岩をラウが破砕する。岩石とも呼べるそれを、いとも簡単に破砕できるものの、目の前の鬼は止められない。
「ラウ……あれは幻覚か？　なんだかドラゴンが……」
「奇遇ですが、私にもどこぞやの将軍が見えます」
「ははっ、くだらないことしか出てこないな」
獲物を再視認した鬼は、こちらに向かって飛翔してきた。
それは正に奇跡というべきだろう、ギンは空中で静止したのだ。
賢者ゼルかと思ったがそれは違った。隣のラウも、不思議な顔をしている。
次の瞬間、僕の体は重力に逆らい、強制的に立たされた。
「久しぶりだな小僧、憎たらしいほどにまだ若いな」
目の前の初老の女性は、私を見るなりノスタルジックのふけっている。ボケなのだろうかと迷ったが、口にしない。
「彼は記憶障害、貴方を知らない」
「記憶障害……なるほどね、あんたのしそうなことだ」
宙に静止したギンは、その呪縛から逃れようと、もがいている。魔力が固体になったかのように、軋む音がする。
女性は舌打ちをし、陣を展開し、ギンを深い眠りに誘う。
ギンは戦闘民族の血から、あらゆる病気にかからず、毒が効かない。だが、魔法で生成された毒は効くようだ。
ならば彼女はなんなのだ、この世界にないものを具現化するなど、ただものじゃない。
「ラルさん。後は任せました」
ラウは気をつかってか、ギンに恐怖を覚えたのか、ギンを背負い教会へと帰っていった。
当然僕も、彼女に聞くことがある。

「あの、僕は誰なんですか？　」
「誰って、お前はお前、私に何か聞きたかったら、私を思い出してからにしな」
聞こうとしたことが一気に否定されたが、ここで負けては情報が得られない。
「じゃぁ、話せる範囲で」
少し考えるようにして、女性は首をかしげる。
「記憶が戻るたびに、お前は傷つき、自分が嫌になる。しかし、それと比例するように力が身につく。それを肝に命じろ、以上だ。それと」
女性は僕に、一つに指輪を渡した。
中心に座しているはずの宝石はなく、リングだけのそれは、どこか意味深なものを含んでいた。
女性はいつの間にか消えていた。移転方陣だろうと思うのだが、動作の一つも見せないほどだった。彼女は誰なのだろう。
僕の心はまた一つ軋みだした。

二十戒：ラルのお仕事（5）

まただ。また仕事が決定した。そう、強制的に。
今回の依頼者はロキさんの友達、リカルドさんのお小遣い稼ぎのお手伝いだ。
内容は越境に護送と穏やかなものでなく、その分お金もはずんでくれているとのこと。前回の仕事で、セムさんとギンさんにお金を貰い、お小遣いも二ヶ月ほどいらない状態なのだ。
なのに、また危なげな仕事を貰ってしまった。越境する場所は、今戦争で危ない状態なのだ。
「なんで僕はついて行かなくちゃいけないんですか？」
「いいじゃねぇか、金だぞ金、なぁロキ？」
「ん？　まぁな」
最初の待ち合わせ場所は、ゼルドモアというバーで、そこからイスタリアに渡って、荷物を運んで越境し、スフィードの危なげな山道をひた走る。
あらかじめ屋敷はこちらの人間に頼み建設済みで、そこに運んで終わりだとのこと。
少し違和感を覚えながらも、文句も言わずに仕事に向かう。
「マスター、キングスハンズ」
リカルドが店主にそう告げると、店主は右テーブルを指差し、リカルドは金を渡す。いわゆる仲介料金だろう。
依頼者は恰幅の良い三十前後の若い男で、黒の上下で中にはおろしたての白いシャツと、どこかの上層部の人間かと思わせるいでたちだった。
「依頼を請け負ったリカルドだ、よろしく」
「なんだ、三人だけか？」
「悪いかよ、量より質だろ？　それより、さっさと済ませようぜ」
「あぁ」

男は重低音の声で返事をし、マスターに多すぎるであろう金を渡して店を後にする。完璧にこなせば高収入が望めると、少しだけ黒い心が動き出す。
「で、国境沿いの荷物はどうやって取りに行くんだ？　」
「それも込みだ」
「リカルド、任せておけ」
まただ。どこか、なにかに違和感を感じるものの、それが何なのかがわからない。
そんなもやもやを抱きながら、三人はロキさんの移転方陣に乗る。流石C3。いや、この国一番の陣をしいている人間だ。国外まで及んでいるとなると、逸脱した存在のようにも思えてくる。
「そうだな、確か、ここからもう少し南だった気がする」
国境付近の雑木林のなか、位置を確認した男は、率先して足を進める。
少して、雑木林を抜けたところにボロ小屋があり、その中に馬車が一台。積荷はしっかりと白い布で覆われていて中は見えない。
再びロキは陣を広げ、馬車ごと移動。
「ここからが一番近いな、俺は遠くから見てるから、リカルド、よろしく」
そう行ってロキさんはどこかへ消えてしまった。男は別段気にしていないようで、二人で馬車の護衛を勤める。
男は馬の手綱を引きながら前を歩き、積荷を見るかも知れないという疑念は抱かずに、歩みを進める。
道中、山賊に会うなどの被害がなかったことが、なんだか余計に怖いが、よしとする。
程なくして予定の地へとついた。六時間という、虚無の時間はどれだけの金になるのか、少しだけ気になるが、まだ営業中だと笑みを抑える。
と、冷静になりかけたところで、異変に気づき、リカルドに質問をしてみる。

「リカルドさん」
「何だ？　」
「ロキさんって、リカルドさんと喋るとき、いつもあの調子ですか？　」
「ん？　あぁ、まぁな、それがどうかしたか？　」
そうだ、前にレイさんが肩を落としたとき、これに気づいていたんだ。
仕事上の関係、かといえども仲間という関係性。心を開きつつあるラウやケイ、対してロキは、確かに僕たちの前では言葉につまり、喋りづらそうだった。
「着いた。ここだ」
山の中の平地、森を引っこ抜いたような木漏れ日と崖の壁の間に、豪華な屋敷は佇んでいた。
外装から、この荷物は少ないように見える。やはりと、僕の勝手な推測は始まった。
「では依頼は成功。と、いうことで、報酬の件について」
「あぁ、それだが……」
「いえ、できるだけ“人間の方”と、お話がしたいのですが」
リカルドが少し驚いているが、たぶん、この男は人間じゃない。
幻覚、否。人をかたちどった人形、否。もっと高度な何かだ。僕たちが知らない、触れられない世界の何かだ。
「お前、なにバカ言ってんだよ」
「ばれちゃったか」
積荷はやはり人だった。ガサゴソと荷物を掻き分け、中から出てきたのは二十歳そこそこの女性だった。
積荷にかさばらないように、薄着で、しかも短めの上下がエロい。
「どこでばれたのかな？　」
リカルドは釘付けになっているので、とりあえず僕だけは冷静に、と、説明をする。
「っと、まず、方向感覚が人間のそれとは比べ物にならない。それ

と、足音がしないし、体臭も無い。人間っぽくない。ただそれだけですよ」
棒立ちの男の首元に鼻を近づけ、女性は臭いを嗅ぐ。
確かに臭いはしないようで、驚くような、何か変な表情をしていた。
「ブムル、車椅子出してちょうだい」
ブムルと呼ばれた男は、積荷の中の車椅子を取り出す。誰が座るのかと思えば、女性は少しだけ宙に浮いていて、足には力が入っていないようだった。
椅子に座ると、今度は大きなカバンを男に取らせ、その中身をごっそりと掴むと、僕に押し付ける。
「これくらいでいいかな？　」
握られているのは札束、カバンを遠めで見るが、まだまだ入っている。誰なんだ、この人は。
「えぇ、ぜんぜん構いませんよ」
リカルドは、まだ女性の四肢に釘付けになっており、ロキさんを呼んで、陣を使いおいとました。
なんだろう、彼女はどこかであったような、そんな気がする。
靄のかかった記憶のどこかに、彼女がいる。そんな気がする。

二十一戒：新人祭り（1）

それはある日突然告げられた。
唐突には慣れていたものの、さすがに心の準備が間に合わないし、そんな度量のある心は持ち合わせていないので、いいえ、と言いたかった。
「新人祭りですか？　」
「そ、先々代の王が三回行ったくらいで、先代はやらなかってけど、なぜだか今年はやるみたいだからさ」
新人祭り、スフィード全国の、どんな職業でもいいので、新人を集め、競い合う祭りである。
僕は参加すると、強制的に武技大会という、端的に言うところの喧嘩に参加することになる。
地方の収穫祭も兼ねているとの事で、美味しいものが食べられることは嬉しいし、民芸品や芸術品の出展と、個人出展の屋台なんかも並んで、お買い得な品々を買いあさるなんてことも出来るのだが、ただ一点において、この新人祭りが嫌いになった。
課題と言われていた四級までは、後一歩のところまで近づいているが、武技大会ともなると、一級の奴らなんかがゴロゴロいそうで怖い。
が、いいえ、なんて言える立場じゃないし、言った瞬間どこかに風穴が開きそうで怖い。
「参加するよね？　」
「わかりました。参加します」
「勿論、優勝するよね？　」
「それは保障しかねますよ」
目が僕を否定している。このおっさんは僕を使って楽しんでやがる。そうとしか思えない。
ケイちゃんが辛うじて頑張ってと言ってくれた以外、僕に救いは

無かった。
「じゃぁ、手続き行って来ますね」
笑顔で送ってくれた。その奥に何が眠っているか、覗くのは止める。
陣を敷き、ロキさん専用のルートを教えてもらい、城の近くまで一瞬にして飛ぶ。
城の門兵は、祭りにつきチェックは甘いものの、数が多いし、一般兵に混じって、バカみたいに強い人もちらほらいる。
中庭を通って中央階段前の特設会場にて、参加申し込みを行う。
「アイゼンヴォルグのラルです。よろしくお願いします」
「あぁ、C3の例の新人君か、登録しておくよ」
どこから情報が漏れたのか、アイゼンヴォルグが国に監視されているのかは知らないが、簡単に申し込みが済んだのでよしとする。
「あ、ちょっと待って、これ」
渡されたのは一枚のチケット。
「出場者には特別に、一人だけ特別シートに案内できるんだよ、それを当日持って来てくれればいいからさ」
チケットには特殊波数魔筆で書かれた僕の名前、なるほど、偽造をされないためのものかと、少しだけ技術の高さに感心する。
さてさて、このチケット誰にあげようか、アイゼンヴォルグの人間には絶対にあげないとして、アパートの大家さん？　いや、勘違いされても困る。
そうだ、あの人ならいいかも知れない。

僕が訪れたのは、豪華な屋敷の前。
そう、先日依頼をしてきた女性。そういえば名前を聞いていなかった。お近づきになれたらと、雄っぽいことを考えながらドアをノックする。
少しすると、あのブムルと呼ばれた巨漢の男がドアを開ける。
「あの……」

と、言葉を発しようとしたときだった。胸に鈍い感覚を覚える。
ブムルの拳が胸につきたてられ、僕は少しだけ飛ばされる。
前を見据えると、ブムルは追撃を開始、その場から一歩後退し、無属性の衝撃を司る魔法を手の中に強制展開、体を動かし、お返しに一発叩き込む。
体ごと吹っ飛んだはずなのに、平気に追撃を開始、相手の時を遅くし、できるだけ拳を避ける。隙を見つけ、腕をとり、投げ飛ばす。
手に陣を展開、無属性の衝撃を生み出し、射出。背に当たったそれは、そのままブムルを運び、木へと激突。
間合いをとり、南刀を抜き、陣を展開、迎撃体制をとると、ブムルは姿を消した。
「ごめんなさい、誰か来るとは思ってなくて」
振り返ると、先日の女性が車椅子に乗って現れる。
ブムルは何も無かったかのように、女性の車椅子を押している。
「扉を叩いた人には攻撃するように言ってるの、で、何か用だった？」
純白というには少し日に当てられているような肌で、足は最近怪我をしたのだと思わせるようなものだった。
見とれている自分をどうにか殺し、用件を伝える。
「あの、これ、新人祭りがあって、それに出るんで招待券貰ったんですよ、あげる人がいなから、貴方に……と、迷惑でしたか？」
「あら、いいのかしら？　ありがたく受け取るわ」
「それと、お名前聞かせてもらってよかったですか？」
これには下心は無い。
単に、僕の記憶の補完についての質問だ。
「エフィール・カティスよ、貴方は？」
「ラジェルタ・ハイデンツァです。皆からはラルって呼ばれてます」
改めて握手を交わす。やはり、僕は彼女を知っている。
そう、あれは数年前、どこかで、彼女に会い、違う女性に名前を聞いた。

駄目だ。やはり決定的な証拠となるようなものは無い。記憶はまだ不完全で、不明瞭なままだった。
最後まで笑顔を保って、その場を去る。

新人祭り三日前のことだった。
彼から連絡があったのだ、そう、賢者ゼルからだ。

二十二戒：記憶の軌跡（2）

教会の扉から待ちの入り口までの距離を、さらに南に同じ距離だけ伸ばした場所に、世界的物語小説フトゥールムの最終話に登場する丘が存在する。

観光地であり、夕陽を見る名所である。それ以外は何も無い。

待ち合わせ場所なんてものでもないし、陽が暮れるころは街から遠く灯りは届かないため、人はだんだんと薄れていく時間。僕はここに来た。

理由は一つ。先ほどあげた人気の無さを考慮しての、あえての待ち合わせである。

相手は先日、僕の体に憑依した賢者ゼル。ある日突然、耳に常備している通信機に問いかけてきたのだ。

陽が暮れてきて、半分ほど姿を消し、あと少しすれば真っ暗になるだろうその時、また、ゼルさんから通信が届く。

『やぁやぁやぁ、来てくれたんだね、嬉しいよ』

振り返るものの誰もいない、探しちゃいけないのかと、その場で声を発することにする。

「お久しぶりです。その節はどうも……」

『最近ようやくここに引っ越してきてね、だいぶ生活が安定してきたんで、君に良いこと教えようと思ってね』

ゆっくりと、僕は歩みを進めて木々の間を覗いて彼を探す。

だが、何処にもいないのだ。魔法での話なわけで、確かにここに存在しなくてもいいのだ。或いは、高度な魔法で、存在自体を消しているか、想像はいくらでもできる。

『君、過去に色々とあったんだね』

「何か知ってるんですか？　ゼルさん自身は僕に何か関係が？」

『俺は直接関係無い、でも、大きく見れば関係があるかもね』

その言葉はどこか恐怖があり、僕の過去にそんな深い何かがある

のかと思うと、怖気で背中が寒い。
『とりあえず、姿は見せられないから、魔法で見せるよ』
「あの、まだ聞きたいことが……」
その後のことは覚えていない、目の前が暗くなり、強制的に見るものが決定され、押し付けられる。
少女の背中、龍の鱗、オーパーツ、誘拐、実験体、眼鏡の男と一人の狂った男がこちらを見ている。黒い世界、酷い虚無感と虚脱感、寂寥と嫉妬、怒りと悲しみ。苦しい。
僕の心の中、僕の記憶の中に酷く刻まれた。次の日僕は、その場に倒れているところを、観光客に助けられたのだ。
酷い吐き気のため、体の中にあるものを全部吐き出し、目からは涙が、全身が痺れ、痙攣が止まらなかった。

「やっと捕まえた。やっと見つけた」
「おっと、斬りかかるなよ、前みたいにさ」
陽のすっかり暮れた丘の上、一人の男が一人の男に話しかける。
「で、何の用だい？」
大小で言うなれば、小さな背の男が質問を投げかける。
大きな背で、恰幅の良い男は、遠くを見つめるような、期待を抱かない目で言った。
「彼女は、今どうしてる？」
「自分で見に行きなよ、アンタだって病気治ったんだろ？」
大きな男は苦しそうな表情で、小さな男はそれを酌んで、小さく“すまない”と呟く。
その後、特に語らいもせずに、数分が経った。その時、大きな男が口を開く。
「で、彼女は？」
「彼女と、彼女の生き残った部下が、こっちに向かってる。君を探しに来てるよ」
「そうか、だったら俺はしばらく表に出ないよ」

「俺にどうしろと？　君は生きてていいんだよ、存在してもいいんだよ」
大きな男は押し黙ってしまい、小さな男も別段話が無く、空白の時間が流れた。
大きな男は、改めて別れを告げるのを止め、何も言わずにその場を立ち去ろうとした。その時、小さな男が声を上げる。
「こいつ、よろしくな」
地に倒れるラルを指差し、小さな男は大きな男に声を投げる。
「彼女のことはすまないと思っている。でも、こいつのことは、よろしく頼む。クラウス」
「あぁ、もう気にしてない。彼女も許してる。じゃぁなゼル」
大きな男は陣を展開させ、一瞬のうちに、その場から姿を消した。
それを小さな男は、悲しそうな目で見送ると、自分自身もそれに倣う様に姿を消した。
ただ一人、その場にラルだけが取り残され、悲しみは寒空にかき消された。
思い出と、さっきまでの重たい空気や空虚なお喋りは、茫漠な時間が飲み込んでいき、ラルの耳にすら残っていなかった。
そこにまた、ラルの謎が増えたことを知るものなど、ここで話していた二人以外、知ることは無いだろう。

二十三戒：レイ（2）

薬の残量が少ない。勢いに任せての過剰摂取が原因だが、最近はペースが速まってきた。私がここにいられるのも、あと少し……。

予定を早めて貰い、薬を届けさせることにした。私は任務の途中であり、少々のわがままも許される。が、過剰摂取の代償は大きく、それについての責任はとれないとのこと、ここに長くいたいのなら、もっと冷静になれと言われた。

「むりだっての」

性格が語っているのだ。性格が叫んでいるのだ。あいつらもわかってるはずだ。こんな性格に生んだ奴らがいけないんだ。

責任転嫁はよくない。改善するべきだと、自分をどうにか落ち着かせ、丘の上へと上る。名前なんか興味は無い。

「なんだ、珍しいじゃないか、あんたが直々にこっちに来るなんて」

「忠告だ。これで、薬は最後だ……」

「なんだって？　でも、まだ私は！　」

「わかっているだろ、お前はおまけなんだ、そのおまけが、糞の役にも立たなければ、どういう命令が下されるのかくらい、バカなお前でもわかるだろ」

「ざけんなよ！　わかったよ、その薬飲み終わるまでに、全部ご破算にすればいいんだろ？　あぁ、上等だ。やってやろうじゃないか」

無理だとわかっていての、意地だ。

バカだってわかってる。ここにすがる理由なんて、無いはずだった。

任務が終われば、薬が切れさえすれば、こんなしけたところからはおさらばだって、それで全てがご機嫌だって、そう、思っていたのに、私はここにすがり付いている。

私はやつの目が見れなかった。哀れんでいるだろう、悲しんでいるだろう、私のこの醜い姿を見て、蔑んで、嘲り笑っているのだ。

「じゃぁ、これが最後だからな……」
切ないような声に、私は驚いた。
私の今を見ても、こいつだけは、待っててくれている。私の帰りを、でも、私はもしかすると……。
「バカなことは考えるなよ、必ず、必ず帰って来いよ」
「あぁ、私たちは汚泥にまみれた糞野郎だ。それでも仲間である、故に我あり、故に君あり、そうあれかし……」
やつは何も告げずにその場を去った。朝日のまぶしさが、少し優しくなるころに、彼は姿をくらました。
同時に吐き気、吐血。落ち着き払って薬を一錠飲んで、木に背を任せる。
薬が全体に回ると、私はため息を一つついて、呟くような掠れた声で叫ぶ。
「どういうつもりだ？　ギン」
木の陰から姿を現したおっさんは、全身から哀れむような気を放ちながらこちらを見る。
目なんて無いのに、見られている気がする。なんだろう、今日はギンの優しさが、妙に痛々しかった。
「心配なんだ。お前は一人で抱え込む。いつまでだ？　あと、どれくらいいられるんだ？」
「もって……二ヶ月かな」
それ以上、互いに超えてはいけない線の上に立ち、互いの顔を見ずに背を預け、存在に依存した。
彼がそこにいるだけで、私がここにいるだけで、今の二人には十分だった。
かみ締めるように、確かめ合うように、私たちは存在した。少ない日数、何が出来るわけでもないもどかしさの中、私たちはいつも通り毎日をやり過ごす。
ただ、それだけ。

二十四戒：ケイ（1）

新人祭り初日、今日という日はもともと、この国の収穫祭の日なのだが、どうせなら戦いが見たいと、女王様直々に、数年前に行われた祭りを行うことになった。

軍事専門科の生徒は、午前で授業を切り上げて、新人祭り決闘祭に社会見学としゃれ込むらしい。

「ったく、酷い話だよな」

私のクラスで、私に初めて喋りかけてくれた、クラスのムードメーカーのメルヴィン君が、不満げに言い寄ってきた。

「大丈夫だよ、戦争記録部の人が少しだけ、今回の祭りを誰もが見れるように、映像にしてのこしてくれるからさ」

「あんた、なんでそんなこと知ってるの？」

いぶかしそうな目で、私の顔をリンが見つめる。リンも私の友達です。

「あ、あの……お父さんが、ちょっと、コネがあって……」

空白の時間が少し流れる。

「なぁーんだ、そーなんだー」

「あーそうなの」

メルヴィン君の言い方は、少し何かを予想していたようにも思えるが、そこを掘り下げる勇気は無い。

学校自体は把握しているものの、クラスの誰にも、私の本当のことは伝えていない。

C3の一員であるだとか、私がアシュのニクスであることも、このクラスの誰も知らない。目の前で笑っている、二人でさえ……。

収穫祭、もとい、新人祭りは三日に分けて行われる。いや、少し語弊がある。三日間ずっと続くのだ。

去年は美味しいものを食べに、セムと一緒に見て回ったが、人に酔って、とても一日じゃ全てを見るのは難しかった。

「今日行く？　夜の部」
「私は行かない、門限厳しいから」
「んだよ、つまんないの、じゃぁ明日、明後日フルで見て回るぞ、いいな」
メルヴィンの提案に皆は賛成した。少しだけ、セムの泣きつく姿が、心の隅に垣間見えたが拭い去る。
軍事専門科の生徒の下校の足音を聞きながら、政魔専門科の私は、勉学に励むのであった。

「それでは、今日から新人祭り始まってはいるが、羽目はずしすぎるなよ、はい、解散」
ようやく授業が終わって一段落、時計は午後四時を少し過ぎているくらいだった。
生徒のほぼ全員が、あいつの授業やたら長いと愚痴を零しながら、それぞれのカバンを手に教室を後にする。
私は、今日いけない分、二日で全てを制覇すべく、メルヴィンとリンとで、予定を組むことにする。
机を繋げて、地図を広げ、それぞれの行きたい場所を赤い点で示す。
「肉と甘いものをかかせない。民芸品はどうする？　」
「私毎年エリス楽団の演奏聞いてるんだけど」
「あ、私も好き」
「はい決定～」
とりあえず、好き～だとか、見たい～だとかに点を打ち、案が無くなった所でそれを繋げてみる。
会場内での魔法の使用は、一般人は不可なので、移転やら風の魔法無しで考えてみると、存外大丈夫な気がしてきた。
「うむ。後は会場の賑わい次第だな」
「ほんと、どう動くかわからないからね」
そんな、何気ない会話をしているときだった。私は、私を呪った。

窓の外に嫌な感じがし、恐る恐る窓に手をかけ外を見る。正面玄関に三人、駄目だ。結界が張られた。物理障壁、人間はもう誰も外には出られない。
「どうしたのケイ？　」
「う、ううん、なんでもない」
私にはこの状況がわかってしまう。駄目だ。顔に出しては、私一人で全て片付けなきゃ。
そうしている間にも、魔法障壁も張られてしまい、外への通信手段もなくなってしまった。
「なんだろ、外騒がしいな」
外に出られない事態を知ってか、騒ぎ出した生徒があふれている。
「皆、ゴメン」
私は陣を高速展開させ、体に優しい催眠ガスを放出、教室中に、学校中にそれを放つ。
二人はすぐに気をなくし、外の生徒も静かになった。私は一人、外に出る。待ち構える三人の襲撃者の前に姿を現す。
「ほほぉ、素直じゃないか、ようやく私たちのもとに来る決心がついたか」
「アーラ部隊では役不足だが、コルヌーが来れば簡単なことだったな」
「さ、行こうか、ケイ」
「君達、何をしている！　生徒から手を離して、結界を解きなさい」
先生の一人がこちらにやってくる、ここの学校の先生となると、魔法免許は二級以上ではあるが、それでは役不足この上ない。
先生だろうが、なんだろうが、ただの金魚の糞でしかないのだ。
私は直接催眠ガスを嗅がせ、先生の意識を飛ばし、先生自体も風の魔法で遠くに飛ばす。
「ケイ！！　」
メルヴィンの声、振り返るとそこには、二人が立っていた。
涙が零れそうになるのをこらえ、私は決心を固める。すると、コ

ルヌーの一人が前に出る。
「ふん。鬱陶しい、私が殺してやるか」
私の決心はもう、瓦解する事は無い。
仲間を見つけ、友達を作り、戦争を経験し、自分の存在を肯定した時点から、私の信念を壊せるものなどいない。
私は背に生えている翼を、最大限に広げた。私の身長よりも大きなそれは、制服の布を破り、雲に覆われた世界の中に翼をはためかせる。
「手出しさせない。私は、貴方たちを倒す」
非常事態に備えた陣を展開させる。
黒い、私だけの世界を出現させ、私とコルヌー全員を隔離する。
陣の張られた孤島となった校庭には、真実をしっかりと握り締める二人の人間の姿があった。
壊さないように、壊れないように、真実を受け止める二人の姿があると同時に、現状の打破ができずに、悲しみと愚かさに嘆く二人の人間のすがたもまた、そこにはあった。

二十五戒：新人祭り（2）

食うもん食って、見るもん見て、楽し～く収穫祭を楽しもうと思っていたのにもかかわらず、決闘祭なんかに出なきゃいけない羽目になった。

午前のうちに大会登録者は招集をかけられ、王宮の特別待合室にて開始まで待機するのだ。

ってことで、招集がかけられる前の祭りの準備中の中、どうにか作ってくれそうなものを探して、美味しいものを食べておかなきゃと行動を開始。

準備にとりかかっていて、客は来るはずがないと踏んでいる店員は、僕のことなど眼中に無い。

そんな中、一人のおっさんが、あたふたする僕を見つけてくれた。

「おぉ、まだ始まってないぞ」

「すいません、決闘祭出るんで早く何か食べなきゃいけないんです！」

理由があやふやで、バカみたいな言葉を投げてしまったが、その時は気づいていない。

「ん～……蜂蜜しか無いけど……ヨークシャー・プディングでいいか？」

「買わせていただきます！」

「金はいいって、お～い、そっちなんか無いか？　この兄ちゃん決闘祭に出るから、飯食いたいってさ」

それから、噂が噂を呼んで、店から店へと僕の名前が飛び交う。

三日前、記憶がよみがえり、卒倒した後、病気のような気だるさに襲われ、廃人状態に陥っていたが、今日の朝いきなり蘇っていたのである。

そういえば二日ほどまともに何も食べていなくて、何か食べなきゃと思い、今に至る。

「っしゃぁ、肉ゲットー！　」
次から次に入ってくる、こんなんで本番大丈夫なのだろうかと思いながら、それを気にせず食べに食べる。
お土産として、スコーンと紅茶をいただき、会場へとひた走る。
「セーフ！　アイゼンヴォルグのラルです」
「はいはい、右手の方向にお進みさい」
抱えたスコーンを落としそうになって、すんでの所で落ちずに済んだ。
後ろを振り返ると、僕よりも当然に大きくガタイのいい男がいた。
「決闘祭……だっけ？　南の国から来たんだが、今から登録しろ」
「すいません、登録は数日前に……」
「あぁ！？　」
男は兵士の胸倉を掴んで持ち上げた。僕は隅にスコーンと紅茶の紙袋を置いて、歩み寄る。
男の肩を叩き、意識を逸らさせると、兵士は床に尻餅を着いた。
「すいません。登録お願いできますか？　」
「でも……」
「大丈夫、僕が責任もって倒しますから」
不思議と勇気が沸いて来た。
偽善心だとか、余裕とかそんなんじゃなかった。なんだろう、勝てると思ったのだ、この大男に。
兵士は上に連絡し、一名の参加をなんとか許可してもらい、男は何も言わずに待合室に向かう。
僕は兵士さんに一礼し、スコーンと紅茶を両手で抱えて待合室に向かう。
ピリピリした雰囲気の中、甘いスコーンの香りがする。
僕は一騒動起きないうちに、壁沿いをゆっくり歩いて隅に座る。
中央に目が向いていたため、隅に人がいるとは思えなかったが、そこにいたのが男でなかったことにまずびっくりしたのと、静かな雰囲気の中に、目の前の少女の腹の虫が泣き出したことに、少し背

に汗が滲む。
「ブレッド・サーゼスです」
少女は僕のスコーンをかじりながら自己紹介を行った。
「ラジェルタ・ハイデンツァです」
僕もスコーンをかじりながら挨拶を交わす。
二人は会話の速度よりも早くスコーンを消化しながら、同じ肩身の狭い境遇の二人ということで、話は膨らむ。
招集終わりまで数分のとき、扉が動いた。
入ってきたのは、部屋の中央や椅子を独占しているがっちりした男の仲間でなく、体つきからしてこちらの仲間であろう男性が入ってきた。どこか、見覚えがある。
「あ、ラグロスさん」
「ラル君だ、久しぶり」
三人隅でスコーンを食べながら、大会の始まりを待ち望む。
ラグロスさんも、ブレッドさんも、上司からの無理やりの押し付けからの参戦で、まるで僕と同じような身の上で、更に親密さが増した。
「一回戦組決めです」
兵士が二人、カードを持ってやってきた。
「一列に並んでください」
私たちは当然ながら、最後尾に並ぶ羽目になった。
先に並んだ奴は、再び控え室の中に帰ってきて、カードの中身をじっくりと見ている。
横目で見ると、そこには数字で“３”と書かれていた。どうやら、何組かに分かれて行うらしい。
「１番だ」
僕は呟く。誰も自分の数字を口にしていないのに、僕だけはそれを口にしてしまい、皆の目が僕に向けられる。
少しだけ嬉しそうにした奴は、きっと１番だ。
ラグロスさんとブレットさんとは、それぞれバラバラの番号、３

番までしかなかったが、運良くバラバラになれたので、決勝で会おうと語り合う。
「それでは“１”を引かれた方、私に着いてきてください」
黙秘は無意味であったらしい、唯一番号を言っていた僕は、何の抵抗も無く着いていく。それに続いて、他の連中も着いてくる。
陣に乗って着いた先は、王都の大三街道の一つ、つまりは、他の二つにもそれぞれ選手がいるのだろうと、推測が出来る。
すると、アナウンスが響く。それは魔法の陣から発せられる音声だった。
「それではそれでは、決闘祭第一回戦。選手はまだ内容を知りません。それでは一回戦はビーチフラッグ、街道の一番先の旗が三つ、それをとった九名が、二回戦進出だ～。
位置について、よ～い……ドンッ！」
流れるようなアナウンスにあっけをとられ、スタートダッシュを出遅れてしまったが、それは吉だった。
「だが、スピードだけじゃこの戦いは勝てないぞ～」
アナウンスが、遅れた説明を始めると共に、街道に敷き詰められた陣が一斉に発動し、魔物が具現化される。
街道の両脇の観客席から家やらには、物理障壁や魔法障壁が張られていて、安全は確立されていた。
僕は一人、魔物を相手に戦っている勇士たちの頭上を飛び越え、神の力を行使しながら、トップを走る。

二十六戒：新人祭り（3）（前書き）

祝、読者数５０００突破。
ありがとうございます。今見ている皆様に感謝の言葉を。届けばと……。

二十六戒：新人祭り（3）

僕は一人空を行く。魔物を飛び越え、魔物を足蹴にし、ゴールを目指す。

卑怯？　否、これは正しい方法なのだ。魔物を倒すことが本来の目的でなく、ビーチフラグが本来の目的であるが故、僕はその点では有利な位置にいる。そう、時を少しだけ操れるからである。

『おぉっと、全体を見渡しても1コースの少年が、突出している。っと、名前はラジェルタ。ラジェルタ選手が一位です』

魔方陣音声が僕の有利を告げる。

進むにつれて、陣は多くなり、敵も増える。自分の数メートル前に陣を敷き、魔物が出現した瞬間に発動、道を開けろと指示するが如く、僕は魔法を発動させる。

「おい兄ちゃん、見に来たぞ～」

観客席におっさんの集団が、さきほど僕に食料をわけてくれた優しき人だとすぐに気づく。

僕は再開に感動し、立ち止まり手を振って対応するが、立ち止まるなんてバカ同然だった。

「バ～カお前、来てっぞ！　」

後ろを見ると、僕を追い越していく長髪の男、目は死んだ魚のようなやる気の無い目をしている。

平行移動しながら相手を観察する。どうやら傭兵らしい、身のこなしが団体戦というよりかは、個人戦で大人数を相手にしている人間の身のこなしをしている。

僕は神の力を行使し、少しずつ間を空けていく。

『第2コースは少女が独走、第3コースは大男と青年が並走中、第1コースのラジェルタ君は、パフォーマンスの余裕を見せながらも一位、その後ろに男が迫るが、この五人は二回戦進出決定か？　』

放送の内容からして、スコーン仲間は順調に歩みを進めているら

しく、安心しながらリズムよく、敵の頭を超えていく。
だが、このまま終わるわけが無い。最後の関門が待ち受けているのだ。
大きな陣が発光し、目が眩みそうになるが、光を腕で遮って全身を続ける。
出現したのは大きな魔物、身の丈人の三倍にして、役六メートル弱。
思考、判断。殺るっきゃない。
体にみなぎる魔力を感じ、まだ戦えると判断すると、魔物の腕が降ってきた。一度後退し、その腕から肩に昇り、頭から地面に落下、同時に陣を高速展開。
出来るだけ魔力を押さえ、この魔物を倒すには、全体的な衝撃による圧迫、広い背中全てを覆うような陣を展開、自分でも驚きながらも、魔力を放つ。
僕の後ろを着いてきた男は、僕から見て左の肩から飛んでやってきて、僕は追いつかれまいと走り出す。
「ギャーーー！」
誰かが下敷きになったようだが気にしない。僕は一番でフラッグを奪取。
続いて長髪の男、疲れきっている目つきの悪い男と、1コースの三つの旗はこの三人に握られた。
『さてさて、続いて二回戦、二回戦は一回戦の敗者が誰か一人、コイツに負けたのは気に入らないやつを一人決定、つまり、準決勝に進めるのは六名だ。時間は一時間だ～』
ん、どういうことだろう、僕たちは何をやれば良いのかわからない。
そうだ、少しだけ魔力を消費してしまったため、回復をしておこう。何もやらないよりかはましだ。
魔力は掛け算で、陣の二重展開により、魔力を回復することが可能なのだ。

かといって、一時間もかかるわけでもない、すぐ終わってしまいまた暇になる。
すると、この戦いの真意を知ったかのように、目つきの悪い男が僕に襲い掛かる。つまり、潰せばいいという単純な考えなのだろう。
が、僕は逆のこれを利用しようと思う。こちらからは攻撃をせずに、神の力を使い、単純に回避を続ける。
道化のような動きを踏まえ、観客を盛り上げることをしていると、笑いが起こる。男は余計に機嫌が悪くなる。
結果、僕と、何もしていない長髪の男が準決勝に進出。が、長髪の男は僕のペースにつられ、一回戦ではしゃぎすぎたと棄権していき、僕は更に暇になった。
『さてさて、いよいよ決勝戦です。1コースから、ラジェルタ・ハイデンツァ～。2コースからブレッド・サーゼス』
スコーン仲間のブレッドさんだ。身長は小さめながらも、僕より一つ年上のようで、僕はさんをつけるようにしている。
『3コースから、ザムール・フォルトナー、この三人で決勝戦です！』
衝撃だった。ラグロスさんが、倒された？
やってきたザムールと呼ばれた男は、今朝僕が倒す宣言をした南の国の男だ。
ラグロスさんは弱くなかったはずだ。三十手前だったけど、軍警察第四課、雑魚の入れないとかセムさんから聞いていたが、あいつはそんなにも強いのかと、少し恐怖を覚える。
が、何故だろう、今朝感じだ何かに近いものを、体の中に感じる。みなぎってくる何かが、僕は勝てるよ、って囁いているのだ。
「お手柔らかにお願いします」
「あ、こちらからもよろしくお願いしますブレッドさん」
ザムールは、一人不適に笑っている。
『さてさて、いよいよ、待ちに待った、決勝戦の始まりだ～』

二十七戒：新人祭り（４）

よくよく考えてみた。
そういえば、一回戦は神の力を使い、実力を少し使ったくらいで勝ち残り、二回戦も神の力を使って相手をバカにしただけで、三回戦に至っては本気で何もしていない。
ブレッドさんは女性ながらにここに立っているだけで、強さがにじみ出ているようにも見えるし、ザムールさんは、あの生存率ワーストワン、第四課のラグロスさんを倒した南の国の猛者。
確実に僕は雑魚であり、二人の相手にすらなるかならないかさえわからない。いや、ならないのほうが確実に思えてきた。
『それでは決勝戦、ルールは至って簡単。最後に立っていた者が勝者である。それでは決勝戦、スタート！』
会場内が喚声に沸く、二対一が三つ、先に動けば不利は否めないがファーストアタックは大事である。
そんな緊張の中、ブレッドさんの声がする。
三角を描くように立っているため、ザムールさんから目を離さないように返事を返す。
「なんですか？」
「貴方って、どこの人なの？　所属は？」
「僕アイゼンヴォルグの新人なんです。Ｃ３って言ったほうがわかりやすいですか？」
「Ｃ３か、そりゃまた死亡確率が高いところへ、私は第二権力五賢補佐役の新人です」
少し疑問。第二権力はこの国のトップに、政治的助言を許された部門で、それはまったくの秘密故、誰がメンバーなのかもわからず、第二権力直属の部門があるなんて聞いたこと無い。
だいたい第二権力の仕事は、政治、もしくは内政、たまに第三権力に助言を投げるだけで、戦闘知識の薄いものの層だとばかり踏ん

でいた。
「えぇい、やる気はあるのかお前ら！　来ぬのなら、こちらから行くまで！」
筋骨隆々の体が地面を蹴り、ブレッドさんの芳香へ、拳が高く掲げられたとき、僕は時間を遅め、ブレッドさんは楽々にそれを避け、僕はがら空きの背中に魔弾を叩き込む。
感触は最低、気にしないと言わんばかりの顔で振り返る。
「小癪な、魔法などと児戯にすぎん」
その時だった。空に一つの魔方陣、僕は展開をした覚えが無いのでブレッドさんかと思えば、ブレッドさんもこちらを見て戸惑っていた。
ならばザムールさん？　いや、魔法をバカにした人間だ、そんなことはないだろうと思っていると陣が完成する。移転魔方陣に似ているが、少しだけ見たことも無い羅列が並ぶ。
次の瞬間、その陣から人が、真っ逆さまにこちらに落ちてくる。
ザムールさんの右、五メートルほどの場所にその人は落下、何事も無かったかのように、砂埃の中から愚痴を零しながら出てきた。
「ったく、あのノーコン変なとこ飛ばしやがって、マジサイテー」
二十代前半、顔中にピアスとおもちゃを見つけた子供の目、黒で身を包んでいるそいつは、徐に近づくとザムールさんの顔に人差し指で触れる。
瞬間、ザムールはその指をへし折ると、痛くも痒くもないという顔で、そいつは会場に高らかと宣言をする。
「オレサマは、イスタリア攻勢軍事機関隊長、ログ・ブランマなるぞ～」
会場は呆気にとられ、バカを見る顔でログを見つめるが、悲鳴が一つ。
それが感染したかのように、悲鳴が、叫びが、狂気の渦となって会場を埋め尽くす。
ザムールさんが頭を抱え転がりながら、全身から血を吹き上げて

声にならない悲鳴を上げているのだ。
主に口や鼻、肛門から出欠が酷く、数秒先に死が訪れた。瞬時に判断をする。僕は、物理障壁を展開し、ログを孤立化させる。
「ブレッドさん、会場内の全員を退避させてください。勿論あなたもです。これは、アイゼンヴォルグの問題です」
「残念だけど、私命令されるの嫌いなの、市民は衛兵達が先導してる。私も戦うわ」
そして、その事実は国を渡る。
新人祭りの会場内のロキに、丘の上のギンとレイに、教会の中のセムとラウにも。

「セムさん……」
「あぁ、神だ。間違いなくね」
セムさんは迷わず陣を展開し、一丁の大口径のハンドガンだけを携え、陣の上に立ったとき、教会のドアが勢いよく開く。
訪問者は、第四課のルグルさんだった。
「セム、ケイちゃんの学校でアシュだ、行くぞ！」
が、セムは動こうとしなかった。
復讐が、恨みが、彼の心の黒いものが、そこまで肥大していようとは、僕は考えていなかった。
次の瞬間、セムの口から言葉が発せられた。
「関係ないね」
その酷な言葉を残し、彼は一人王都へと向かう。
僕を残したのは、僕に任せたと、そう言いたいのか、だったら言えば良いのに、彼はそこまでして、自分を曲げず、恨みだけを真っ直ぐ通したのだ。

二十八戒：新人祭り（5）

軍警の出動により、ケイの学校の周りにはバリケードが張られていて、その内側の黒い球体もまた、バリケードで固められていた。
動きが見られないものの、学校の校長、軍警四課、友達だという生徒二人と僕が、学校の周りのバリケードの中、黒い球体を囲むバリケードの外に陣取る。
「で、なんでラグロスはここにいるんだ？　」
「いやぁ～、受信機入れたままで、わざと負けて来ましたよ、仕事優先」
僕は着実に現状を把握していた。この球体はケイの魔法によるものだと、来たのは前とは違い、コルヌー部隊で、三人だけだということ、ケイの友達は、まだケイを信じているということ。
軍警の二人に任すのは少し心もとないし、この黒い球体に干渉できるのは、僕だけなんだ。
「駄目ですね、触れてみましたがただの球体で、金属でも、期待でもない、空間なのは確かなんですが、干渉を拒まれます。完全にお手上げです」
僕はその間にも、着実に干渉を始める。黒い球体に、ケイ自身に。
その時、少しだけ怖いことが起こったのだ。
「お前も無理だろ、先日の辺境の事件、お前の神の力は嗅覚の超強化なるものと判断した。そうだろ？　ラウ君？　」
ルグルは見下すようにこちらを見ているだろう、だが、そんなことは別段気にもならない。
少しだけ、軍警の情報網の厚さを知っただけ。ただ、それだけのことだった。
「残念だけど、それ、僕の特技だから」
そう言って、蔑むような笑いを浮かべながら、僕は黒い球体に干渉する。

そう、これはケイの心であり、彼女の悲しみである。人は感情に触れられない事象から、普通の人間には触れられない。そして、何故心がここにあるかというと、隔離空間を想像した後、隔離空間と現実世界との境界線を心で示したからであり、この球体そのものは心ではないが、この黒さだけは、本物である。

僕がこの黒い球体に干渉できたことを言うのであれば、僕の神の力は必然とわかるだろう、そう、人の心に干渉できる。語り掛けたり、盗み聞きしたり。

僕はこの力が嫌いだけど、役立つこともある。これがその二回目だ。

「ドーンッ！！　弱いし薄いよぉ～ボウヤァ」

ログは僕の物理障壁を容易く割り砕き、背に抱えた異形の銃を取り出し、乱射して見せた。

晴れやかな空を割るように、断末魔の最初を合図するかのように、それは発射された。

無論、会場と観客席には、それ相応の魔法障壁があるのだが、銃弾はそれをいとも容易く貫いてゆき、逃げ遅れた人々の命を蝕む。

「やめろー！」

ハンドガンを乱射しながら接近、歯の無い南刀を首に向かって振り下ろす。

異形の銃は更に姿を現し、僕の攻撃を防ぎ、払いのけられる。

一方は観客を、一方は僕に向けて放つ。僕はどうにか体制をたて直し、弾丸を避けることにいっぱいになる。

ブレッドさんの魔方陣が光を放ち、五条の刃がログに向かって放たれる。さすがに防御に手一杯になり、銃の矛先がブレッドさんの魔法へと向けられる。

魔法を魔力で構成された銃弾が相殺し、その間を潜らせた数発がブレッドさんを強襲するが、ブレッドさんはそれを避けると共に、更に炎の魔方陣を展開、次から次へと、攻撃の暇を与えさせない。
僕はそれに便乗し、魔力の銃弾を作る要領と同じ陣を展開、前後左右からと、容赦ない攻撃を食らわせる。
そして、僕は今日の大会で見せた、あの大きな魔力を一点に向けて放つ。
それはログの胸に、直径役十センチほどの風穴を開かせる。ログは一瞬事態がつかめず、自分の胸を見る。
「ありゃ？　やっちまったかい？　この、オレサマが？　」
そう言って、ログはぱたりとその場に倒れる。
「なんちゃって」
後方、ゼロ距離の地点にログは再び現れる。
魔法の陣も無い、幻覚魔法を使った形跡も見られない。なんなんだこいつ、もしかして、不死身なのか？　そんな不安がよぎる。
「待たせたな」
「よぉーラル、女連れとは偉くなったな」
ギンさんとレイさんが、それぞれの大業物を肩に担いで現れると、ログの目つきも少し色を増す。
瞬間、ログの胸を数十条の弾丸が貫く。
それに容赦の文字は伺えず、胴体は見事に真っ二つになり、最後の一発で、頭も粉々に吹き飛ばされる。が、ログは復活する。
今度は視認できるようなスピードで、ブクブクと泡のようなものが下半身から噴出し、体を形成していく。切り離された上半身は、空気中に散っていった。
「な、なんなのよ、あれ」
グールを、アシュを、いや、目の前の僕ですらなにかわからないものを、初めて見た正しい感想だろう、それに答えるべくか、セムが、いつもは見せないような憤怒の表情で現れる。
「神だよ、僕たちのたった一つの生きる目的」

「よーよーセムチャン、お久しぶりッスね」
「お前を最初の標的とする。アイゼンヴォルグ諸君、これは命令だ。奴を逃がすな、肉の一片、骨の一欠けら、声の一音ですら許さん、奴を再起不能なまでに……絶やせ！」
「言ってくれるね、出来損ない」
その時は、まだ、知らなかったんだ。ログが、あの人の標的であることを。

二十九戒：新人祭り（6）

「非難は兵士に任せておけ、クヒトは北から中央、ガブリエルは南から中央にかけて監視を強化、臨戦態勢に入るように兵に指示をしろ」

目の前の惨事に、女王は激を飛ばす。

クヒトとガブリエルは、早速陣を展開し、現地に飛ぶが、俺にはまだ命令は下されない。

「メーリクラウス、君には私の護衛を勤めてもらう」

「はい、元よりそれが私の仕事であります」

「しっかりと見ておけ、あのセムが動いておるということは、あれはグール、もしくはそれ以上の何かだ、糸口を見つけろ」

グールの正しい殺し方は、教会の機密事項で、口外はされていない。

国はその大きさをもってしても、一人のグールを殺すのに手間取るが、一つの教会の自由を保証するだけで、その不安は解決できる。

が、それは同時に、教会にグール抹殺を独占的な商売として持っていかれたようなものだ。国としては、教会の協力は嬉しいものの、市民に示しがつかないという面、兵の不安が絶えないという問題が発生する。

が、それも今日までだろう、目の前のグールと思わしき敵を殲滅するとき、教会の情報は露呈する。その予定だった。

銃が火を噴き、再び戦いの火蓋が切って落とされるが、それは拒絶された。

ギンさんが神の力を用い、銃弾が全て発射された数センチ先で止まっている。それに気づいた頃には、二人はすでに剣を構え、レイ

さんが押しつぶすように大上段から野太刀を振り下ろす。
斜め後ろに飛翔しそれを避けるものの、その背後にギンさんが追いつき、袈裟斬りにする。
剥がれ落ちるように落ちていく上半身、優先順位が高い上半身を重点的に、一片も遺すのを止めようと、セムさんが走る。思考を一瞬止めるべく頭をハンドガンで打ち抜くと、陣を展開する。
僕はその光景に着いていくのがいっぱいで、最後のセムさんの陣の展開を補助した程度だった。
ブレッドさんは、グールというものを見たことが無いのか、虐殺とも思われる行動に、少しだけ震えが見えている。しかし、再生を繰り返すグール自体に、更なる恐怖を感じている。
「やっぱり、ブレッドさんは市民の非難の手伝いを」
「えぇ、そうさせて貰うわ、私じゃ戦力にならない」
少しだけ笑って見せる、その笑みには皮肉も込められていたようにも思える。
僕も初めて見た神に震えが止まらない。正直、もっと神々しくって、手も触れられないような、そう、想像するに難くない天の神様だとばかり思っていた。
しかし、目の前の神と呼ばれた奴は、グールのような再生能力と感染能力に、人間の思考を組み合わせている。しかも、再生するだけならば、苗床である人間の部分を破壊すれば良いだけなのだが、どれだけ殺しても、復活するのだ。
レイさんが押しつぶし、ギンさんが微塵に切り裂き、ロキさんが火器で燃やし絶やそうと、一向に神は倒れないのだ。
「だー、うっぜーマジキレタからな」
陣が次々に展開される、それを止めようとするものの、それをも阻む魔法が展開されていく。人間の許容範囲を超えている。
それはこの国で言うところの召還魔法だった。
細身で長身の、黒いその物体は、ただ目の前に鎮座して、こちらを見下ろしている。

すると、頭から瓦解するように、身がひも状に解けていく。同時に、風が逆巻いたように、僕たちを取り囲む。
それは刃だった。紐の一つ一つが、防ぎようの無い煌く刃を携え、着々とこちらに迫ってくるのだ。
しかし、三人は冷静だった。セムが何かの陣を、召還の陣を展開すると、それにレイが手を触れた。次の瞬間、黒い物体が一瞬にして消えた。
「はー！？　どういうことよ、まさか神の力？　反則じゃね？　」
「だったら、君もそろそろ再生するの止めてくれるかな？　」
その時、僕の通信機にロキさんの声、まだ姿を見せていないが、何処からか確実に神を狙撃している。
『そいつ、名前、なん、て、名乗った？　』
相変わらずの掠れた声は、もう聞きなれた。
まだ確かな記憶を、ロキさんに伝える。勿論このときは、悪気も無く、何も出来ない自分に唯一で切ることだからと、率先して言ったまでだった。
「イスタリア攻勢軍事機関隊長、ログ・ブランマ。そう名乗っていました」
全てを伝え、一瞬の静寂、そして、ロキさんが始めて姿を現す。
僕達と神の間に立ち、こちらを向いて陣を展開する。
「待てロキッ！　」
セムさんが気づいた頃には遅く、ロキさんの移転方陣は、四人を遠くに飛ばした。
が、流石に四人も飛ばしたせいなのか、新人祭り決闘祭の会場である宮廷は見渡せる場所に落とされた。
さっきまでいた場所の空に、大きな陣が見え、空間が少しだけ歪んで見えたかと思うと、何もなかったかのように、静寂だけが広がった。
「まさか、な。神が、ロキの復讐の相手だったとは……」
アイゼンヴォルグの目標は神を殺すこと、しかし、それはセムさ

んだけの問題であり、他の人間はアイゼンヴォルグの権利が目的であり、それぞれに個々の目的がある。

今その目的が、アイゼンヴォルグを離れ、一人歩きを始めだした。

これはほんの、始まりに過ぎなかった。

三十戒：記憶の軌跡（3）

僕が無力を知ってから三日、ロキさんからの音沙汰は無い。
怒りと、怒っている自分に苛立ちを感じているセムさんの顔からは、いつもの笑顔だけが抜け落ちていた。
ケイちゃんは何故だか、いつも以上に上機嫌で、それが心配をかき消そうと、皆の空気を元に戻そうと必死になっているのだと知ると、少しだけ息苦しくなる。
後は、普通なのだろうか、いつも通りなのだろうか、釈然としない顔の二人がいるだけだった。
神の想像以上の再生能力と、痛みさえもろともしない体、一瞬のうちに移動を成し遂げるあの技、そのどれもが二人の不安を誘う。
「セム、いい加減話せよ」
「詮索はしないでほしいな」
「詮索じゃねぇだろ、情報よこせって、どうやったら、神は殺せるんだ？　」
長い長い沈黙、答えは憮然とした態度でどこかへ消えた。いや、はなから何処にもいなかったのだ。
「正しい、神の殺し方なんて、僕も知らないよ……」
その言葉は、誰に向けられたものでもなく、自分自身に対しての独白のように思えた。そして、何よりも自分を蔑んで見えた。
そして、それ以前に、僕は無力だということからは、どう足掻いても逃げられなかった。
だったら、僕は、僕のすることは一つしかないのだ。
静かに教会のドアを開け放ち、僕は僕の目的のため、力を手にするための一歩を歩みだす。それを咎める者も、止めるものも、ここにはいないと知っている。

スフィード女王国首都、軍警察本部第四課、現在員三名との馬鹿げた組織に、僕の第一歩を飾る人物がいる。
ルグル・ハイムヒュート。僕の幼少期の記憶を持っている人間である。
ノックをしようとドアに指を着けるが、先にドアが開け放たれる。ルグルさんだった。
「ラル君だったっけ？　何か用か？　」
「はい、僕が、ルグルさんに助けられた後のお話を、聞きにきました。
「まぁ座れ」
これほどの殺風景がこの首都にあるなんてと、少し呆気にとられるが、ルグルさんが投げたパイプ椅子を受け止め、それに腰を下ろす。
「どうしてもか？　」
意外な言葉だった。少しだけ言葉に詰まる。
聞いてはいけない、話せないことがあるのだろうかと、少し恐怖を覚えながらも、僕は小さく頷く。
「実のところ、私もよく知らないのだ」
「と、言いますと？　」
そしてルグルは更に言葉を紡ぐ。
イスタリアの実験に使われていた村は、用済みとなり、戦争の交戦地ともなれば、策に使うにはもってこいの場所なのだ。
そこでイスタリアは、街の人間にそのことを伝えずに爆発の魔方陣を設置、見事それは成功に終わり、その後、現状を把握するべく、ルグルさんが向かったところ、僕だけが生きていて、名前を聞いたところ、ラジェルタと呟いたそうだ。
その後、既に妻子持ちのルグルは、養子縁組の準備を進めたが、何故か軍の上層部がそれを受理せず、軍の施設に引き取られることになった。

その後、第三権力では手の出せない、第二権力に、更にその後、イスタリアの何者かによってさらわれた実験体がいたという噂だけがあったとのこと。

「記憶が無いのは何故だかはわからない、どこで消えたのかもわからない。こんなんで役に立ったか？」

瞬間、頭は言葉を、映像を繋ぎ合わせる。

戦争、人間、血、そして、死。斬り、突き、引き裂き、押し潰し、千切る。痛みが、悲しみが、憎しみが、沸々と音を立てている。

「おい、大丈夫か？」

声がする、かすれていてよく聞こえない、光が、消えて、行く。

三十一戒：生は一生の苦しみにて、ひと時の安らぎを……（1）

崩れてしまった。いや、もともと築き上げてなどいなかったのだ。少しだけ、周りが興ざめしただけで、なにも支障はないと思っていたのだ。

ラルは強くなって、また帰ってくると考えていいだろうが、ロキはいつ帰ってくるのだろうか、神に殺されてはいないだろか、復讐しかなかった心に少しだけ違う色が含まれていることに、少しだけ驚いた。そして、ラウは僕に幻滅しているし、レイとギンは、今まで感じたことの無い不安にかられている。

それもそのはず、死なない敵に対し、無尽蔵の敵に対し、対処のわからない敵に対し、正面切って喧嘩しようとしている私に、疑念や不安を抱かずに着いてこれる人間なんかいないし、それ以上の存在だとしても、着いてこれるとはわからない。

「皆、集まってくれ話がある」

無機質に、棒にでもなったような足を引きずり、四人が集まってくる。

瞳には生気を感じるのが精一杯で、未来の輝きは皆無のようにも思えた。

「そろそろ戦争が起こる。そこで、教会の方針を変えてでも……」

「バカ、テメェが揺らいでどうする」

レイの激が飛んだ。

「そうだ、芯がしっかりしてなくちゃ、組織は上手く立てないだろ」

ギンの声を久しぶりに聞いた気がした。

「だな……戦争が起きても、僕たちは僕たちのやりかたを貫く。それでいいか？」

全員が頷き、少し救われた気がした。

その時、教会の扉が開け放たれた。訪問者は王宮からの使者で、内容の検討はつく。

「戦争、だろ？　」

「……い、起きろー……ったく、面倒だな」
意識がはっきりとしてきた。目がかすむが、目の前の人物が誰であるかはわかるし、グーではたかれていることもわかるし、この場合はパーで頬を叩くのが普通じゃないのかと、微妙な突っ込みも入れれるようになった。
「しょうがねぇ、グーで蹴るか」
「待って待って、起きてますって、それに、グーで蹴るって……っ！　」
グーで蹴られていないのに、わき腹が痛みに悲鳴を上げている。
記憶の再生と共に痛みが生じるのは覚悟していたが、頭痛に、それから骨折だろうか、肋骨が折れているのだと思う。
どうやら、記憶の重要性が増すたびに、痛みも比例して大きくなるのだろうと、思っていられたら納得できたのだ。
「スマン、余りに面倒だったから一回蹴った」
蹴られていないと思っていたら、ありえない速さの蹴りに目が追いついていなかっただけだった。
「俺が良いことを教えてやるよ、病院に行け」
「慰謝料……」
「駄目だ、公費が降りない」
駄目なのはこのおっさんの正確だとか、暴力性の方だと思う。
応急処置として、魔法で自然治癒力だとか、骨の回復を助ける成分を摂取、あと痛み止めも。
予想以上の速さで陣の展開が行え、痛みも最小限に抑えられた。
そして、少しだけ考えなければならないことがある。感謝するべきか、悪態をつくべきなのだろうか、いや、後者が正しいのだが、前者にしておこう、人当たりがいいことと、軍警に知人がいるのも

いいことだ。
感謝の色が見えない程度にお礼を言って、今度は王宮に向かうが、門前払いをくらった。どうやら近々戦争があるらしい、なおのこと早くしなくてはと思うが、それでも駄目らしい。
僕を知っているのは、後クラウスさんと、仕事であった女性だけだが、あの人はあの人のことを思い出してからじゃないと、話してくれないから……。
そう考えていると、早くも行き詰ったことに気づかされる。
今日の宿を取らなければ、食事もしていなかった。町に出てみると、人ごみの中から懐かしい顔を見つける。確か……。
「ブムルさん！」
リカルドさんの仕事でお会いした。人間じゃない何かが、その巨体を揺らしながら買い物をしているのが見えるが、あちらからはこちらが見えていない。
僕は急いで背を追うが、途中で見失ってしまった。
そうだと気づき、僕はあの屋敷へと向かう。
相変わらず妙に神聖な家屋だと、遠目で関心しながらノックをし、深呼吸。
刹那、ドアは蹴破られ、膝蹴りが飛んでくる。右の膝蹴りのため僕は右に避け、左のフックをと構えるが、着地後の伏せにより、僕のフックは空を薙ぐ。ブムルのその体制からの胴タックルにバランスを崩すものの、こちらも負けじと腕を解き、顔を踏みつけ後退。着地後、そのままの勢いで突進。正確な右ストレートが飛んでくるが、それを左手で流しながら身を半回転させ、右ストレートを払いのけた左腕の肘を、遠心力を利用して腹に一発お見舞いする。
そこでまた同じ展開、一瞬姿を見失ったと思ったら、ブムルはエフィールさんの車椅子を押して、家の中から出てくる。
「やぁやぁ、毎度すまないね」
「いえ、楽しみになってますよ」
「先日は災難だったね、大会、見させて貰ったよ」

選手が招待した者が通される特別室は、他よりも防壁が厚く、心配はしていなかった。
だが、少しだけ申し訳ない気持ちになる。
「で、今日は何のようだい？」
「あの、ここに泊めてくれませんか？」
そう、ホテル代がバカにならないがための、当たって砕けろ作戦なのだ。

予期していたが、これほどまでの早いとは、セムも少し驚いているが、疑問が一つ横についている。どこかで見たことのある少女が、使者の横にくっついている。
「あぁ、それもあるのだが、それは少し先の話で、今日は、この子をここで働かせてくれないか？」
「どっかで見たことあんだよな」
「そうか、やはりレイもか、私も見たことあるなと思っていたのだよ」
そう、少女の用であり、目つきは真剣で、どこか大人びているような、子供のような……。
が、一向に答えが出てこない。
「ブレッド・サーゼスです。先日はお世話になりました」
「あ、ラルの女か……」
ギンが呟くと、そこにいたセムとレイだけが頷き、ケイとラウは、不思議そうな顔をしていた。
決闘祭の時、ラルと一緒に、決勝に残った少女だった。
一つの疑問が解けると、一つの疑問が浮上し。彼女は、何の新人だったのだろうか、そして、彼女は、あの女王の送り込んだスパイで、グールの殲滅方を知ろうとしているのだろうか。
疑えば限が無いが、今は暖かく迎えてやろう。

なんだか今は、心が温かなのだ。

三十二戒：生は一生の苦しみにて、ひと時の安らぎを……（2）

今回の戦争は、中央突破を図り、一気に敵の本拠地まで侵入する算段である。

女王の動きは早く、南の国にも応援を要請し、最後に残った教会にも、今さっき連絡があったところだ。

今回教会の任務は、クルオルデルタの殲滅。

アイゼンヴォルグとは違い、個人団体だと思っていたのだが、先のポルメルワンの戦いで、戦場にクルオルデルタの二番手、フィルグがいたことが明白になり、支障をきたすものとして排除命令が下されたのだ。

蛇の道は蛇というが、この人数でどうしろというのだと考えたとき、自分が動くのを忘れていた。それと、ブレッドというなかなかに強い女性も加わり、人員は不足しているものの、力はほぼ互角だろうと思う。

「南の国からの援軍がおよそ五万、戦争への本格的な干渉はせず、南と北の敵を排除し、中央突破の手助けをしてもらうとのこと、我々の目的は一つ。クルオルデルタの破壊、つまり、トップのドゥレイを殺すこと。質問は？　」

ブレッドが勢いよく手を上げる。

「私は何を？　」

「そうだね～、自由にが基本だったけど、群がる雑魚をよろしく。皆は幹部を、誰か、フィルグ倒したい人」

どうせレイが手を上げるのだろうと踏んでいると、思いも寄らぬところから手が上げられた。

「そうか、わかった。フィルグはラウ、君に任せるよ」

「南の国の援護を、ガブリエルとクヒトで、メーリクラウス殿はいかがなさいます？　」
女王が覗き込むように私の目を見る、どうかしたのかと聞き返すような目をしてみせると、女王はため息を一つ漏らす。
「最近おかしいじゃない、柄にも無く黄昏ちゃったりさ」
「正直気持ち悪いぜ」
「ガブリエルに言われる筋合いは無い」
確かに、心の支えはある。
忘れようとして、忘れられなくて。果たそうとして、果たせなくて。中途半端な私に見出された一つの道に、進めばやっと何かがしっかりと終わりを告げる。
が、今それに向かってしまえば、また途中で投げ出すことになる。そんなジレンマに、深くはまってしまったようで、なかなか抜け出せないのだ。
「ほらまた。まぁいいよ、どうせあんたはあたしの護衛だ。よろしく」

「ルグルさ～ん。また三席に撒かれちゃいました」
「二席は異常なし。こっちに合流しろ」
第二権力殺人事件。第三権力の一部、第二権力の上層部、第一権力。という、極わずかな人間しか知らないこの事件、つい最近もまた、四席が殺された。
手口は同じで、何か強力な魔法か何かで、顔を打ち抜き即死。首から上が無い状態で五席も、四席も発見された。
外の世界と唯一通じている二席が証言をし、一席は姿を見せず、三席も軍の追跡をかるくあしらってしまっている。張り込みすら出来ない状況に、今出来る一番間抜けな二席を張り込み中。
「一席やはり動きなし。見張りがばれてますね」

「エマもこっちに合流してくれ」
見張りは簡単で、二席も気づいていない様子だった。
家を囲むように三人を配置し、玄関、裏口、窓を監視。つまんない。
なので、事件をまとめて見ることにする。
殺されたのはどれも第二権力五賢老員で、四席の人とは俺も面識があるので、そうだと言える。
しかし、公にもされておらず、第二権力の末端は知らないような闇の組織の人間を殺せるものといえば、それなりに権力の高いもの。
推理というものをやってみれば、あの女王が一番怪しいが、あの女王も第二権力に殺されかけたんだ。自業自得でいいと思うし、この事件の捜査依頼者が女王なわけで、とどのつまりわかりません。
「目標の家に接近する人影を発見」
「エマ、目を離すなよ」
足早に進み、二席の家へと侵入、二席も受け入れている様子だ。
それが窓から伺える。
「目標に接近。発砲用意完了」
顔は確認できない。黒い外套で身を纏い、全身を覆い隠してしまっている。
「ラグロス、目標の家に接近だ」
これが、悲劇の始まりだった。
「目標殺されました！！　」
「エマ、放て！　ラグロス進入だ。外は任せろ！　」

三十二戒：生は一生の苦しみにて、ひと時の安らぎを……（２）（後書き）

ＰＣが壊れました。
当分更新できないので、今回はＰＳＰからの更新です。
どれだけかかるかわかりませんが、少々休まさせていただきます。
漁火。

三十三戒：生は一生の苦しみにて、ひと時の安らぎを……（3）（前書き）

ただいま～、そして、開けましておめでとうございます。

三十三戒：生は一生の苦しみにて、ひと時の安らぎを……（3）

「あの、これって何ですか？　」
異変に気づいたのはブレットで、教会の魔法陣が怪しく煌く、それはロキの使用している魔法人で、一縷の期待を皆に抱かせた。
当然答えは簡単だ。彼は生きている。神がどうなったかを、皆は知りたがっていた。殺し方は？　他の神は？　と、半ば安心感を抱いていたが、それは即刻打ち消される結果になった。
陣が収束し、姿を現したロキの姿は慢心相違で、体中から血が溢れていた。が、それは怪我ではなく、病気のようであった。
体中のあらゆる皮膚という皮膚に、直径１ｃｍほどのニキビのようなものができており、それが破れ、血が溢れている。
全員が呆気にとられているなか、セムはロキを抱きかかえ、その場に寝かせてやる。
そして、一滴の血を指にとり、レイに差し出す。
「解析をよろしく願う。ギン、治せるのは君だけだ」
驚きがギンの顔を埋めた。
「なんであんたがそのことを……」
「そんなのはいつでもいいだろ？　」
「知ってるなら尚更だ、俺には無理だ」
「大丈夫、レイを信じろ、ロキの血から病気を吸い出せ」
それはセムとギンの間の話であり、誰もその話にはついていけない。
何を言っているのか、何が起きようとしているのか、その全てが不明なだけで、ギンは自分のすべき行動を決めかねていた。
レイが血を解析し、神の力で弾き飛ばす行動を取ると、ようやく安心したのか、ギンが一歩ロキに近づく。
すると、徐にロキの首に歯をたて、血をすい始めた。
セム以外はその行動がわからず、恐怖しか出てこない様子で、た

だただその光景を見守っていた。
ギンは数秒すると口を離した。しかし、その一瞬後のこと、ギンの全身が震えだし、悲鳴がとどろいたのだ。
「レイ、君の力でギンの中のロキの血を消すんだ」
レイの神の力、手のひらに一定以上乗せたもの、それと同じものを消し去る能力。だが、本人は使いたがらない、それは、この力がいかに残酷かをわかっているからだ。
意を決し、ギンの震える体に触れ、力を解放すると、ギンの震えが止まり、静寂が訪れる。
「二人が起きるまで、少し話をしようか……」
そこでやっと、ギンの話が始まった。

ギンの故郷は、西の国から植民地とされていた。そして、国で見つかったオーパーツの実験台になり、今の戦闘民族国家ができた。
つまり、ギンやギンの故郷の人間たちは、人間でありながら人間でない、オーパーツに侵食された生き物なのだ。だから寿命が一定で、人間に持ち得ない力を持っている。
ギン達の能力は、異性の血を吸うことにより、力を保てることと、全ての病気を遮断すること、が、ギンは長年血を飲まずに生きたことから、力が失われかけているのだ。
今回の行動は、ロキの中にある病原菌、またはそれを混ざった血を吸出し、病気をギンの体で無効化した後、レイの力でギンの中のロキの血を消し、一件落着だと思ったのだ。が、誰もわからないことが一つ、同姓の血を吸った場合、どうなってしまうのか、これは誰にもわからなかった。
「これが、私の知っているギンの情報だ」
「だからか、ここに来たと時私は、ギンに太刀打ちできなかったけど、今じゃ……」
レイが悲しそうに呟く、誰も何も言えない。言うべき言葉が見つからない。

そして、初めて知った仲間の秘密に、己の中に潜む秘密を照らし合わせ、自分の弱さを知るのであった。

「二人が目覚めなくとも、任務は実行する、明朝出発だ」

セムの声はいつもと違い、どこにもしっかりとした意思はなかった。

三十四戒：戦いを止める戦い

「結局あの二人、目を覚ましませんでしたね」
「気にするな、あいつらは死なないよ、二、三回死んだほうが丁度良いくらいだ」
大きな建造物をバックに、三人の女性が無表情に言葉を交わす。
一人は紫色の禍々しい篭手をはめ、一人は人一人ほどありそうな野太刀を抱え、一人はこれから死闘を繰り広げようとするにはあまりにも無防備な格好で、合図を待っていた。
そう、ロキとギンが目を覚まさないうちにも、世界は順調に悲劇に向かっていった。戦争はもう避けられないところまで進んでいたのだ。
レイ、ケイ、ブレットが陽動作戦で、クルオルデルタの雑兵を煽り、その隙にセムとラウが内部に侵入、ラウがフィルグと戦う。クルオルデルタのトップであるドゥレイへの道は、フィルグを倒すか、他にある装置を壊すことで開ける。つまり、陽動が先か、ラウが先かでセムがドゥレイを倒すことになっている。
『さて、そろそろ行きますか？』
「こっちは準備万端だ、いつでもオッケーだ」
『それでは始めてくれ、騒ぎ出したらこっちは適当に行くよ』
「は～いっと……さ、始めますか」
この作戦は至って簡単なものではない、計画が上手く進行しなければ、死傷者がでることも否めない。
なぜならば、相手は寄せ集めの雑兵でなく、一つの思想の下に集まった、神の力を持った兵（つわもの）の集まりなのだから。
それでも戦いは終わることが無い、なぜならば、これは戦いをやめるための戦いだから、終わることは、もしかしたら無いのかもしれない。

「さてさて、騒いできたね、僕たちも行こうか」
ラウは深く深呼吸をする。始めての大役を自ら志願したからには、彼の中で何かが動き始めているのだろう。
ラウは不思議そうにこちらを見るので、笑顔で返して壁に穴を開ける。そこから中に入ると、静かにも程がある。何か妙だと感じ始めた。
その嫌な勘は半ば当たっていた。それは嫌でもあるが、好都合でもあった。
謁見の間、ドゥレイの部屋までの唯一の道、そこでフィルグは待ち受けていた。
「フフフ、ようやく楽しめそうな相手が来たよ、いつも退屈だったからね」
「それはよかった、うちの子がやる気なんでね」
「そっちの子が？　セムさん、アンタが相手してくれよ」
次の瞬間、フィルグの顔の前で小さな爆発が起こった。ラウが起こした魔法の陣が、音速の速さで魔法を発動させた。
ラウの魔法の特徴は、大きな魔法さえ出せないものの、小さな魔法ならば重ねることもでき、そこからの連撃は人一倍の威力を発揮するのだ。
「フフフ、怒らせたいのか？　なかなか良い挑発だ」
「それはどうも、まずは僕を倒してからにしな」
極一般的な、腕の長さほどの剣を抜き、ラウはフィルグに向かって突進する」
フィルグは魔法をメインに戦うことはわかっていたため、陣を発動させる前に、小さな魔法で牽制をし、地道に倒す方法をとる。
小さな爆発を背中で起こし、その腹部に向かい剣を突き立てる。
紙一重でかわしながら、更に魔法を発動させるが、ラウはそれを意図も簡単に防いでみせる。小さな爆発を四方八方で起こし、逃げ道を無くし剣を振るう。
フィルグの口はいとも簡単に減り、不利な立場に気づいたのか、

戦法を変える。
小さな魔法を防ぐために、ラウより先にフィルグは魔法を発動させ、大きな魔法へと繋げる。
が、ラウはそれを防ぐのでなく、避けることにより、無駄な魔力の消費を避ける。
避けながらも魔法を発動させるラウが有利に事を運び、剣は腹部を貫くが、急所ではなかったようで、押さえながら薄ら笑いを浮かべる。
「できた、ハハッ」
気がつくと地面に小さな陣ができていたが、それは人を殺傷するには向かない陣だったが、体がそこにひきつけられる。
足こそ動かないものの腕は動く。フィルグは近づくものの、攻撃を仕掛けようとしない。
ラウの攻撃の範囲に入ったとき、ラウは剣を振るうが、それをフィルグは素手で受け止め、その手からは鮮血が滴る。それでもフィルグはニヤついている。
「知ってのとおり、僕たちも神の力が使えるんだよ」
フィルグの手がそっとラウの体に触れる。次の瞬間、フィルグの体の傷が無くなった。血は流れるのをやめ、痛みは引いていった。
が、それはラウに流れ込んでいた。同じ箇所に裂傷ができ、まだ若い体は痛みを知らず、顔は苦悶を訴えている。
「君も使ったらどうだ？　神の力を、僕も手加減するのはもう飽きたよ」
ラウは苦悶の表情でセムを見ると、セムは部屋から去っていく。
謁見の間の広い空間に、ラウとフィルグの二人だけ、その状況を良しと見て、ラウは神の力を発動する。
「できれば、使いたくなかったな」
それは独白であり、フィルグには、神の力の発動さえ視認できないし、その恐怖に怯えることしか許されないのだった。

三十五戒：戦いを止める戦い（2）

外では激しい攻防戦が行われていた。幾重にも重なる雑兵に、レイ、ケイ、ブレッドは善戦するものの状況はよくない。

戦力で言えば明らかにこちらが有利なのだが、相手の人海戦術の前に体力はほぼ限界に達していた。レイは持病が牙を剥く前にと、薬を噛み砕きながら戦っていて、それを横目で見る二人は、それを心配するものの、声をかけられるほど暇ではなかった。

ブレッドは新人ながらも、いままでいた役職がよかったのだろう、神の力を持っていなくても、対人に関しては鬼神の如き力を持っていた。

しかし、そんな彼女が一番、この戦場で危険な状態にさらされていた。それはレイの考えであって、思い過ごしであれば一番いいのだが、聞かずにはいられなくなり、疑問を投げかける。

「ブレッド、それは何？　その篭手は」

「前の職場の先輩に貰ったんです、部隊の形見として」

彼女の部隊の人間がいなくなり、自然消滅という形で古い王宮の部隊は消えた。その部隊はわからないが、彼女の持っている形見の篭手が、危ない存在だということは、なんとなくわかる。

「ブレッド、その篭手は外しな」

「何でです？　」

「オーパーツ、だよね？　レイさん」

「そ、いつお前の命が食われるかわからない、それは使うな」

黒く禍々しい妖気を放つ篭手、それはまるで人から生気を奪うような動きを見せており、彼女もどこか顔色が悪い。

このメンバーでここを切り抜けるのは無理だとすれば、ロキとセムにかけるしかない。彼女は初めて、人を信じることにした。

「認めんぞ！！　」

ロキが神の力を発動させて数分、どこまでも響く罵声が響くが、少年は微動だにせず、自分の力を必要まで抑えて戦っている。
フィルグは怒りに任せ、自分の許容量異常の魔法を発動させる。その衝撃に耐えられず、建物は崩壊するはずだったが、発動とともに消えていく。ガラスが壊れるように、淡い光を放ちながら。
そう、これがロキの神の力。全てを読み解く能力。人の心であろうが、魔法の本質や、弱点でさえ、彼には明確に聞こえてしまう。
それゆえに、彼は今この瞬間も、フィルグの悲しみや怒り、それらに絶えながら戦っているのだ。
「君の負けだよ」
それでもまだ攻撃は止まず、一歩一歩フィルグに近づきながら、魔法を壊す。
フィルグも負けじと魔法を放つが、虚しいだけに霧散して終わる。その距離はやがてゼロになった。
ロキは能力を行使したまま、人間の体の弱点を読み解き、指でそこを強く押すと、完全にフィルグは失神した。その後、ロキも同じようにその場に倒れる。
恐怖という感情を、むき出しの心で受け止め続ける、それは若干十代の人間には辛すぎることなのだ。
戦闘が終わるのを感じ、セムは失神するフィルグを固定させ、目隠しをし、クルオルデルタのトップ、ドゥレイの待つ最上階へ、彼は余裕の表情で階段を上っていく。

時として、全ての因果は皮肉から生まれているような気もする。今教会を出た彼もまた、その因果にとらわれている、操り人形なのかも知れない。
そしてもう一人、スフィード軍の本拠地に向かう一人の男、彼もまた、因果が紡いだ運命なのか、それとも、その因果が生んだ、運

命に抗うものなのか、それはまだ誰もしることのない物語。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7517e/

正しい神の殺し方

2010年10月13日18時29分発行